
俺と半透明な彼女の日常

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と半透明な彼女の日常

【Nコード】

N1465BA

【作者名】

アルト

【あらすじ】

これはどこかの町のどこにでもいるような大学生のお話。

その大学生、名を長門宗助と言うのだが、彼には人には言えない秘密がある。見える人、いわゆる霊能力者と呼ばれるこの世ならざる存在を見て、聞いて、感じるこの出来るこの現代では人々が失った力を持つ希少な存在だった。

そんなある時色々な事情により宗助は亡くなった祖母から譲り受けたとある屋敷に住む事になったのだが、まさか新しく住む事になった家に鎖に繋がれて成仏出来ない幽霊がいるとは予想さえつかなか

った。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

これは見えちゃう人、長門宗助と成仏出来ない幽霊、葉月のちよつとした日常のお話

シーン0 始まりの始まり

俺と半透明な彼女の日常

シーン0 始まりの始まり

この世には二つの存在がある。一つは普通に生活し人と会話し何かを思いそれに準じて生きている者、もう一つはすでにその役目を終え旅立つべき者であるがこの世に未練を残し、旅立つことが未だ出来ずにいる者の二通りの存在がいる。

すなわち、幽霊と呼ばれる存在だ。

この者達は普通の人々には見ることも触れることも感じることも出来ない。まだ人間が彼らのことをよく理解しているときにはそれが当たり前だったらしいが、今ではその力の片鱗すら見ることは出来ない。

しかし、ごく稀にその力を今でも行使することが出来る人間がいる。それを人は霊媒師または、ながとそうすけ霊能力者と呼び崇め時に恐れた。

今、この話の主人公でもある、長門宗助の前にもそのこの世ならざる存在、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が目の前にいた。宗助もまたこの時代には珍しい霊能力を持った貴重な存在ではあるが、その宗助はたった今日の前で起きている現状に困惑を隠せなかった。

目の前には確かに幽霊と呼ばれる存在がいる。しかし、その幽霊は宗助が今までに見たことがないぐらいに奇妙だった。

年は16、7ほどの少女、髪は長く腰の辺りまで伸ばされた黒髪はその毛先までもつややかに光っていた。服装は彼女によって様々だったが、なぜか目の前の彼女は巫女服を纏い、どういうわけか左足には罪人が着けるような足枷と見た目からして重厚な鎖がついて

いた。しかし、その鎖も足枷からわずか30センチほどのところで断ち切られており、すでにその役目を終えていた。

ちなみにではあるが、宗助が困惑しているのはその幽霊少女が原因ではない。もちろん、彼女を最初に見たときも困惑を隠せなかったが、今の宗助はそれ以上に困惑していた。

「……ところでお前は何をしてるんだ？」

「おはようございます宗助さん。もう少しで出来上がるのもうちょつとだけ待っていてくださいね」

「いやそうじゃなくて……」

宗助はそれ以上言う気にはなれなかった。のほほんと返す彼女に對して宗助はなんでこんなことになっているのだろうか？ と首を捻る他なかった。

幽霊少女こと名を葉月^{はづき}という見目麗しい少女（幽霊だが）は鼻歌を歌いながら上機嫌に朝食を作っていた。ただ、目の前のそれは明らかに朝食と呼べるものかは疑問だった。

「今日はですねーじゃーん！ パンケーキです。おいしそうですねー朝から頑張っちゃいました」

「確かに頑張ったみたいだな。ただな、一言だけ言わせてくれ」
宗助はそつとため息をつきながら目の前の現状に頭を悩ませる。

「いくらなんでも作りすぎじゃないか？」

ダイニングテーブルのそばに置いてある椅子に腰を下ろしながら言う。テーブルの上に置かれた皿にはパンケーキが乗っかっている。それも一枚や二枚じゃない。軽く見積もって十枚はある。それも一枚の皿に對して十枚だ。そしてそれがどうやら一人分らしい。

漫画や何かでこんな光景を目にしたことはあるが、実際に目にしてみると、なんというか……

「えへへー宗助さんに喜んでもらえて光栄ですー」

「……喜んでねーよ」

「あう！？」 もしかして量が足りなかったですか？ じゃあすぐに追加を……」

「……朝からこんなに食えるかって言いたいだけだ。……ったく、家にあった小麦粉全部使いやがって。卵も……買ってきておかないとな」

「何を言うですか、糖分は脳を働かせる栄養源としてとっても重要なんですよ。葉月はですね少しでも宗助さんのことを思ってた……」
「ああ、そうかい、それはありがとよ。でもな、物には限度つてもがあるんだ。でもなこれはいくらなんでもこれは多すぎだろ」

宗助は朝からげんなりした。どうにも葉月はいつも想像の斜め上をぶつちぎって行動する癖がある。放置しておくの大抵ろくな目には遭わないことを宗助は彼女とのそんな短くもなく、かといってそれほど長くもない同居生活で学んでいた。

はぁ……と、ため息交じりに何かを諦めた様子で宗助は冷蔵庫からいつもの通り牛乳を取り出すと、キッチンの棚に置いてあったカップになみなみと注ぐ。幸いにも牛乳だけはなんとか残っていたみたいで、それを飲み干すと低血圧な頭がようやくはつきりとしてくる。横では「ぐす……宗助さんに喜んでもらえると思って頑張ったのに……」とへこんでいる幽霊一名がいるが、出来るだけ気にしない様にしながらやり過ごそうとする。

しかし……今日の朝食は牛乳だけで済まそうとしている宗助をよそに葉月は目の前に積まれたパンケーキを食べながら「……おいしいです……やっぱりパンケーキはいいですね……ハチミツもたっぷりかかって甘いはずなのに……あれ？　どうしてでしょうか……このパンケーキしょっぱいですね……もしかして、砂糖と塩を間違えたでしょうか……ぐす……」と、明らかに宗助に聞こえるぐらいの声で呟いていた。白々しいことこの上ない。そんな葉月に宗助は内心、うぜえ……と、思った。

未だぐすぐすと鼻を吸いながらパンケーキをちびちびと食べる幽霊を横目で見ながらため息一つ、そしてとうとう宗助は観念した。
正直に言えば幽霊相手に慰めの言葉なんているのか？　なんて思いはしたが、どうせ放っておいてもろくなことにはならない。仕方無

しに頭に手を置いていつものように言ってる。

「……葉月、俺が悪かった。そうだな、葉月はこんなに頑張ってくれたんだな。ありがとう。さ、俺もパンケーキが食いたかったんだ。冷めないうちに食べようか」

宗助としては大して感情ももっていないただの棒読みの台詞を並べ立てただけだったのだが、葉月にとっては効果覲面で「あう、宗助さん！ はい、食べるです！」と言うと、葉月はずーんと落ち込んだ表情から一転、枯れた大地に太陽が刺したような顔をするとうきうきとテーブルについた。まさにうきうきウツチングだ。それを見て宗助は「朝から面倒くせえ……」と、呟いた。

ちなみにだが、この話の主人公でもある宗助がこんな目に遭ってるのには少なからず理由があった。それを事の始まりなんていうと格好よく聞こえる気もするが、宗助がこんな目に遭う要因となったことを考えると、実際にはそんなにも格好のよいものではなかった。今にして思えばあれ自体も何かの陰謀として捉えることが出来るのかもしれない。それぐらいに奇妙だった。

出来すぎた出来事に関して人というものは必ず何かの理由をつけたがるものだが、今の宗助の日常は側から見れば偶然起きた出来事だおといえる。しかし、どう考えてもやはり何らかの理由をつけたくなる。そんな哲学的なことを思いながら宗助はここに引越してきたときのことを思う。

「宗助さん、コーヒー淹れましたから飲んで下さいです」

「ああ、ありがとう」

「どうしましたか？　なんだか難しい顔をされてますけど、もしかしてコーヒーよりも紅茶のほうがよかったですか？」

葉月は何か自分が粗相をしてしまったような顔をしてあわあわしていた。

「気にするな、別にお前が何かしたわけじゃないんだ。ただ、俺自身こんな目に遭ってるというのに意外と冷静でいられるもんなんだなって関心してただけだ」

「？」

目の前の幽霊は不思議そうな顔をしていたが、気にせずに出されたコーヒーに口をつける。相変わらずこの幽霊のいれるコーヒーは普段自分で淹れるものより美味かった。前に気になったので美味しさの秘密なんかを聞こうと思ったら「そんなの簡単ですよ。宗助さんへの愛がこもっているから美味しいのですよ」なんてことをぬかしてきたのでその日は一日中無視を決めこんでやった。さすがに、葉月も堪えたのか翌日には華麗なる土下座を決めて謝ってきたが。

宗助と葉月は一応は同居という形でこの家に一緒に住んでいる。元々は誰も住んでいなかった家に引っ越してきた宗助だったが、まさか新しく住むことになった家にこんな変なのがいるとは想像もしなかった。

宗助は霊能力者だ。とは言ってもこの世ならざるもの、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が見える程度のもので俗に言う除霊といった類のことは出来なかった。それは霊媒師でもあった宗助の祖母ならば出来たのだが、宗助にはその力は引き継がれなかった。そのせいで幼い頃からこの世ならざるもの達から度々襲われることになったり、現世に生きる者達から気味悪がられることも一度や二度ではなかった。だからというわけではないのだが、出来るだけそういったことには関わらないようにしてきた。それが宗助が幼いなりに身につけた処世術だった。

しかし、やはり宗助に流れる血はそういった存在を惹きつける何かがあるようで、こうしてなし崩しのにはあるが幽霊と一緒に住むこととなってしまっている。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

なんて会話にすらなっていないその会話が彼女と交わした最初の言葉だった。それもなんだか懐かしい思い出のようにも感じる。

「宗助さん宗助さん、今日は葉月が一位ですよ！ なにかいいことあるかもです！」

「……そうですね」

葉月はテレビの占いに喜びながら鼻歌交じりで上機嫌にしていた。
これはそんなちょっとしただけ不思議な（いや、やっぱり結構不思議な）
幽霊とその幽霊に振り回される主人公のお話。

シーン0 始まりの始まり（後書き）

見えちゃう人の宗助と成仏できない葉月の少しだけ非現実的な日常
をお楽しみください

シーン1 未知との遭遇

シーン1 未知との遭遇

「……本当にここで合ってるのか？」

男は心配そうに呟いた。

手にはこの情報社会にとってはゴミくず以下の代物でしかない地図（小学生にはじめてのおつかいをさせるために母親が書いたような地図であまりにも簡略しすぎて地図とは呼べない）とこの家の鍵が握られていた。

辺りを見回せば建てるのに一体いくら位かかるのだろうか？ と言いたくなるようないわゆる、豪邸と呼ばれるような大きな家がそこら中に乱立していた。

高級住宅地ということもあり、大きな塀とその中にいる大きな犬、どこの国の車かは知らないが明らかに高級車だと見た目でわかる車が何台も止まっている豪邸をいくつも見る。あるところにはあるんだなと関心しつつ、この国の富裕層と貧困層の格差を見たような気がした。

それにしても……だ。

「確かに屋敷と言えば聞こえがいいが……これは……」

彼の目の前には確かに高級住宅街らしく、それなりに大きな家が建っていた。そう、大きさだけでいえばの話だが。

無駄に大きな塀には絡みついた蔦が塀を覆いつくし、広々として綺麗だった庭は放置されて草が生え放題、真っ白い家は風雨にさらされたせいで白というよりは灰色に近い色に変化していた。

一言で言えば、廃墟。または幽霊屋敷というのがぴったりの外観だった。

「幽霊屋敷だよな……」

天の声が聞こえたのかどうかは定かではないが、どうやら彼、この話の主人公長門宗助も同じ思いだったようだ。

「……今ならまだ引き返せるか？」

そんなことを思いはしたが、残念ながら今の彼にはその選択肢はなかった。

宗助がこの古ぼけた屋敷にやってきたのはある理由からだった。

先日、宗助の祖母が亡くなりその際に財産分与が行われた。生前、宗助の祖母は残された家族に遺言を残しており、孫である宗助にはなぜかこの屋敷が与えられたのだった。

当初、宗助はこの屋敷を相続するのを断ろうと思っていた。しかし、この屋敷が建っているのは偶然にも宗助が通う白峰大学の近くなのと、実家に帰っていた際に借りていたアパートが全焼してしまふという不幸が重なったために仕方なくこの屋敷に住むことになったのだった。

話に聞いていたときはちゃんと管理してある屋敷ということだったが、実際に実物を見ていなかった故の多少の不安はあった。しかし、これはその多少の不安というものを遥かに逸脱していた。

しばらくの間逡巡を繰り返していたが、ついに意を決したようでは扉に備え付けられてる鉄格子をそっと押すと、錆びて朽ち果てている割にはすんなりと開いたことに驚きながらも中に入ってしまった。

扉から家までのわずか数十歩のところには石畳が敷かれており、この住宅が元々はそれなりに素晴らしい住居だったことを感じさせた。石畳のおかげで草をかき分けながら進むということはなかったが、外観から見てもあまりよろしくはない。どうやら草むしりをするのには必至だった。

家のドアの前に立つと、ドアには何かの装飾だろうか？あまり芸術だとか美術的センスはない宗助にも匠が彫ったとわかるような彫刻が施されていて、この家の元々の高級感（今は見る影もない）を感じさせていた。

ポケットから鍵を取り出すとそれをドアノブの下にある鍵穴に差

し込む。鍵自体も年代物のようで今のご時世それこそプロの方ならわずか瞬きする間に開けてしまいそうなくらいにセキュリティーとは縁遠い構造だった。

カチャ、と小気味のいい音とともに長い間かかっていた封印を解くかのように鍵が開錠される。ギィィィ、立て付けの悪い建物のような音を出しながらドアを開くと中は埃塗れの様相か？ と想像していた宗助の予想を見事に裏切り、意外にも中はとても綺麗に掃除されていた。

それこそ、ついさっきまで誰かが住んでいたかのように……。

一抹の不安を、持ちつつも中に踏み入れる。広々とした玄関は、靴を脱ぐスペースというものがないらしく外観同様洋風の家にといた造りとなっていた。日本人である宗助には靴を脱いで入る習慣があつたため、やや戸惑い気味ではあつたものの、初めて入る家に靴を脱ぐのも嫌だと思つていたのでこれはこれで都合がよかった。

玄関からまず最初に見えるのは広々としたロビーのような場所だった。一軒家なのにロビー？ なんて思つたが実はそこがリビングルームだった。備え付けられたソファは革張りで、どこかが破けているなどの欠点もないただただ綺麗に手入れをされているものだった。

さすがに電化製品なんかの類はなかったが、家具なんかはそのまんまになつていようでソファの他には大きな古時計とちよつとした机が置いてあつた。それらもソファ同様、壊れているとか埃が被つているということもなく、いたつて綺麗に手入れされていた。吹き抜けになつているリビングの天井は高く、そこからベランダのようになつている二階部分の部屋らしきドアが三部屋分見えた。

改めて、この家の見取り図を眺めるとよくわかるが、宗助が今いるリビングからさらに奥に進むと、ダイニングとキッチンがあるらしく、その横には風呂とトイレが備え付けられていた。そのダイニングから別の通路がありそこに対面するように二つの部屋が設けられていた。広さはいずれも六畳とまるで使用人の部屋のような造り

になっていた。

部屋の中には作業机とクローゼット、それとベッドが同じ配置でそれぞれの部屋に置いてあった。わかりやすく言えばビジネスホテルの部屋のような感じだ。

吹き抜けになっているリビングから二階に上がれる階段があり、そこから上に登るとリビングが一望できる。そして、そこに等間隔で並ぶ部屋があり手前から十畳の部屋が二つと一番奥の部屋が二十畳となかなか広い部屋になっていた。

十畳の部屋には同じくベッドと机、クローゼットがありここも下の部屋と同じように最低限生活に必要な家具が揃っていた。違うとすれば部屋の広さぐらいなものだろう。ちなみに二階、一番奥の二十畳の部屋はどうやら書斎だったらしく、窓際にはゆっくりと腰を落ち着けて本を読むための机とイスが置かれており、壁一面に置いてある本棚の中にはぎっしりと詰まった本があった。ちなみになんてこんな場所にあるのかは不明だが、正しいメイドのあり方、ご主人様とのお付き合い第一章、第十三章、お兄ちゃんと呼ばせて、尽くす女になる！！なんて誰が読んでいたのかわからない本が、厚みがあり羊皮紙や革張りの装丁といったかなり高級そうな古書と同じように並んでいた。補足だが、ご主人様とのお付き合い第一章、十三章の間の第八章だけがなかった。誰かが持ち去ったのだろうか？

「……まさか、な」

宗助が言ったまさかというのは先日亡くなった祖母のことだ。さすがにそれはないと思うが……。

一通りぐるりと回って見たがどこもおかしな点はなかった。電化製品のほかにガスコンロや食器などのいわば消耗品に近いものはなかったが、机やベッドなどの大事に使えば長く使える家具はまるで宗助の為に用意されていたかのように置かれていた。それもまともな姿かたちで。

管理されていた。というのは宗助がこの屋敷を相続した際に聞いていた。だから、家具なんかがちゃんとした形で残っていたのはわ

かる。しかし、不思議なのは管理している人間がいるならば、外の状況はどうだろうか？

ちゃんと管理しているならば外の庭だってきれいに掃除されていてもおかしくはない。

それにおかしなことはそれだけではない。

「……なんで管理している人間がいらないんだ？」

何気なく思ったことだったが、どうにも不自然すぎる。家族はこの屋敷の存在のことはよくは知らないようだった。祖母が残した遺言には“この屋敷には管理している者がいる。詳しくはその者に聞け”としか書かれていなかった。鍵はその遺言とともに残されていた。

鍵は宗助が持っている一つしかない。

では、誰がこの家の管理をしている？

「……どうのことだ？」

ますます謎は深まるばかりだった。

考えていても仕方ない。とりあえずはこれからの生活に必要なものを買い揃えなければならない。それに外の草むしりやこの家の掃除も必要だ。中のほうはきれいに掃除されているが、外のほうは手付かずだった。

「さて、と」

そうと決まればあとは動くだけだった。まずはこの家の管理人を探すことにしよう。

宗助はこの家に入ったときから薄々と感じていた。この屋敷に存在する管理人の存在を。

「おい、この家にいる管理人とやら、俺の声が聞こえるか？ 俺は長門宗助、長門雪の孫にあたる人間だ。俺の祖母さんは先日死んだ。それで俺がこの家に新しく住むことになった。もし聞こえるなら姿を現してくれ」

誰もいない家に宗助の声だけが響く。側から見れば何をしているのか？と言われそうだが、宗助には人には言えない秘密がある。

この世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在を見て彼らの声を聞いて彼らの存在を感知できる能力。普通の人間には備わっていない能力を持つもの、霊能力者だった。

宗助がこの世ならざるものとのコンタクトを図ろうとしたが、相手のほうは聞こえているのかどうか知らないが、宗助の呼びかけには答えなかった。代わりにパシィ！という派手なラップ音が返事の代わりと言いたげに鳴り響いた。

「そうか、そっちがその気なら構わない。ならば俺にも考えがある」宗助は仕方ないと首を振ると一目散に二階のとある部屋へと駆け上がった。

コンコンと念のたドアをノックする。もちろん相手から返事などあるはずがない。

「結構強情な奴だな。ま、幽霊の考えていることなんか俺にはわからないし、わかりたくもないがな」

一人呟きながらドアのノブを捻る。

「やっぱ開かないか」

ここは先ほど宗助が家の中を探索していたときに唯一、ドアが開かなかった部屋だった。そして、先ほどから感じている気配もこの部屋から強く感じられた。

となれば、管理人とやらがいるのはこの部屋しかない。

に、してもだ。鍵がかかっている部屋にどうやって入ろうか？

幽霊などの類であれば鍵がかかっているようにいまいとドアをすり抜けて入ることが出来るが、宗助には無理な話だ。いくら霊能力者だといっても、自身が透明になれるわけではない。

外側から窓を突き破って進入するか？ バカを言え。そんなのは映画の世界だけで十分だ。ましてや、引っ越してきて早々、家の修理なんてまっぴらごめんだった。

「……と、なると」

後の答えは簡単だった。

ドンッ！！

「ちいつ、そんな簡単に開くわけないよな」
体当たりだった。

この世ならざるもの達が見える宗助ではあったが、別に変身出来るわけでもないし、ましてやすごい技が使えるわけでもない。幽霊が見える以外はごく普通の一般男性なのだ。

何度かドアに体当たりを仕掛けてみるが、ドアはびくともしない。いくら頑張っても開かないドアに苛立ちを覚えながらも一度思い体を起こすが、次第に体力は限界に近づいていた。

ハア、ハア、と息を切らせながら、ふらふらする足をなんとか気力で立たせドアの前に立つ。

「ふう————よし！」

宗助は柵ぎりぎりまで下がるとこれで最後とばかりに開かずのドアへと突っ込む。

と、その時だった。

「……うーん、さっきからどんとどんとうるさいですう」

「な!？」

「え? ——ひゃう!!」

眠そうな声が聞こえたと思ったらさっきまでびくともしなかったドアが開いた。しかし、車は急に止まらない。という言葉をその身体現しているような勢いの宗助はその勢いを止めることなく……

「……いつつ」

そのまま中にいた人物目掛けてダイブすることになってしまった。ゆっくりと体を起こすと、宗助の体の下には謎の美少女がいた。艶めく腰まで伸ばされた黒髪、陶磁器を思わせるような、かといって病弱とまではいかないぐらいの白い肌、見た目は小柄でなぜか巫女服着用。見た目はどこからどう見ても日本人らしい容姿をしていたが、その姿は半透明だった。

明らかにこの世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在だった。

「おい、大丈夫か？」

「……う、ううん」

幽霊相手に大丈夫か？ もなにもないのだが、このよくわからない状況に気が動転してしまっている宗助はあたかも生きている人間相手に接するように話しかけていた。対する少女は気を失っているのかうなされているように声をかすかに漏らしていた。

「……どうやら問題はなさそうだな」

少女を押し倒しておいて問題がない訳ないはずなのだが、これは不慮の事故だと思ふこととして片付けることにした。

しかし、このまま放置しておくのも後味が悪い。いくら幽霊とはいえ女の子だ。宗助は未だに目を覚まさない少女を抱えあげるとそのまま部屋の中にあったベッドの上に寝かせることにした。

それにしてもここは一体？

宗助は少女がいた部屋の中をぐるりと見回してみると、部屋の中にはベッドのほかに机、クローゼット、テレビ（ちなみに薄型でデジタル放送対応だった）などもろもろ生活用品が用意されていた。机の上には書斎にはなかったご主人様とお付き合い第八章が置いてあった。どうやらこの部屋にいた少女が読んでいたようだった。

ベッドの上には女の子の部屋らしくぬいぐるみやふかふかした枕が置いてあった。カーテンも発色のよい薄いピンク色でここが改めて女の子の部屋なんだと認識させられた。

だが、非常に残念なのは、初めて入った女の子の部屋が幽霊の部屋で、ましてや部屋に入ろうとドアに体当たりをかまし、なおかつ事故とはいえ女の子（幽霊だが）を押し倒してしまうという裁判にかけられたなら間違いなく有罪確定の行為をしてしまったことだった。

ひとしきり部屋の中を物色していると、ベッドに寝ていた少女が少しむずがるような仕種を見せた後、その閉じられていた瞳をゆっくりと開いた。

「ん、起きたか」

宗助の言葉に少女はひとしきり目をぱちぱちさせ、ガバツと起き上がると一言、

「お、お帰りなさいませご主人様!!」

「誰がご主人様だ!!」

「あうう……ご主人様ではないとすると旦那様でしょうか？」

「……俺はいつからそんなに偉い人になったんだ？」

「じゃあお兄ちゃん？」

「……生憎と俺は一人っ子だ」

なんだか突っ込むのも疲れてくる。それよりも言うことが山ほどあるはずだ。

「というか、知らない男が勝手に自分の部屋に入り込んでたら普通は不審がらないか？」

「え？ あ……ど、どちら様でしょうか？」

「……お前は顔も知らない相手にご主人様と言うのか」

なにやら論点がかなりずれてきているが、この際気にしないでこう。気にするとますますややこしくなりそうだからだ。

やれやれ首を振るとため息を吐きながら宗助は自己紹介を始めた。

正直、宗助の疲労はこの時点でピークだった。

「俺の名前は長門宗助。今日からここに住むことになった」

「あう、長門……宗助さんですか？ となると雪さまと何か関係がある？」

「ああ、俺は祖母さん……ながとせつ長門雪の孫にあたる。ちなみにだが俺の祖母さんは先日死んだ。その時に財産分与で俺にこの屋敷が与えられたというわけだ」

「そうですか……。雪様がお亡くなり……」

目の前の少女は宗助の祖母の死を悲しむと手を合わせてその死を悼んだ。内心、幽霊が死んだ人のことを悼んでどうする!？ なんて思ったが、この際ツッコミはなしだ。

「で、俺の自己紹介が終わったところで聞きたい。お前は誰だ？」

「あう！ そ、そうでした。自己紹介がまだでした！ 初めまして

です！ 葉月は、葉月は……ええ、と……誰でしょうか？

「知らねーよ！！」

「き、記憶喪失です！ どうしましょうか！？」

「……どうしましょうか」

ピークだった宗助の疲労は今や限界突破を果たしすでにクライマックスへと突入していた。

「……というわけです」

「……というわけって……何も説明してねーだろーがあー！！」

宗助はなぜか部屋に置いてあったちゃぶ台をひっくり返して叫んだ。

「ひいい！ だ、だって、本とかには「……ということだ」とか「かくかくしかじか」とかで通じますですよ。なのにこの世界ではそれが通じないですか！？」

「世界言うな。生憎となこの世の中はそんなご都合主義でなんか出来ていないんだよ。で、だ、そんなことはどうでもいい。それよりも、お前は一体誰なんだ？」

「あうう……先ほども言いましたが自分が何者なのか覚えていないんです。一応、名前としては葉月という名前を雪様から頂きました。それ以上のことはなんにも……」

「ふーん、ま、説明はかなり不十分だが大方のことはわかった。それでお前がここに理由はどうしてだ？」

「それが……」

と言って葉月は自分の足についている足枷を宗助に見せた。

「それは？」

「……これが何なのか葉月にもわかりませんです。気がついたときには足にこれがついていましたから」

葉月の足についている足枷は見るからに重厚で簡単には外れそうには見えなかった。足枷から伸びる鎖はどこにつながっているのかはわからないが、とても長くその先は壁の向こうまで続いているよ

うだった。

「雪様がこのお屋敷をお建てになったときから葉月はここにいます。最初、雪様は葉月をなんとか成仏させようとしてくださいましたがこの鎖があるから葉月が成仏出来ないとおっしゃっていました。それに鎖のせいでこの屋敷から出ることもさえも叶いませんでした。それを知った雪様は葉月のこの鎖を解こうと尽力を尽くしていただきましたが、雪様でもこの鎖を解くことは出来ませんでした。それで行く宛てのない葉月を雪様はここに置いてくださったということですよ」

葉月は宗助がひっくり返したちゃぶ台を直しながら話を続ける。

「雪様は記憶すら失っていた幽霊の葉月をとてても大事にしてくださいました。この世の中のことを話してくださいだったり、自身の話もしてくださいってそれはそれは楽しいひと時でした」

葉月は遠い記憶を懐かしむような顔で話していた。宗助はそんな葉月の横顔を眺めながら不謹慎にもその横顔を美しいと思っていた。って何を考えてるんだ俺は……。出来るだけ葉月に悟られないように顔を背けながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「しかし、雪様がお亡くなりになられたとは……。先日、雪様が葉月にお別れを告げに来たと言われた時はどうということかわかりませんでした、そういうことでしたか」

「……大往生だった」

「……きつと最後まで笑っておられたんでしょうね」

「……ああ、最後まで笑っていたよ」

宗助の言葉に「そうですか」と呟くと、葉月は鎖をチャリと鳴らしながら宗助に代わりのお茶を出した。

「それでお前がこの家の管理人をやっているってわけか」

「はい、雪様は大事な用があるからといってこの家を離れることになりました。その時ですが、雪様はこんなことをおっしゃっていました。“いつになるかはわからないけど、そのうちあんたを成仏させてやる人間が現れる。その時にはそいつとよろしくやりな”って

「どういうことでしょうか？」

「……あんのババア」

「そういうことか、これでなんとなくだが全ての辻褄があったような気がする。つまりは……。」

「してやられたってことか」

「？」

「いや、気にするな」

諦めたように呟くと宗助は葉月の淹れたお茶を飲んだ。

案外、美味い。幽霊の淹れるものだからと不安を隠しきれなかったが、正直、自分で淹れるものより美味かった。

「それでなんですけど……」

「ん？なんだ？」

「えと、あなた様のことをなんとお呼びすればよろしいでしょうか？」

「どういうことだ？」

「雪様が葉月にお別れを告げに来た際に“近いうちにそこに新しく住人が増えるからその時にはそいつの世話をしてやってくれ”と言われまして、その方のお世話をするということは私のご主人様になるということですから、お呼びするときはご主人様がよろしいのかと思ひまして。もし、ご希望であれば旦那様やお兄ちゃんとお呼びすることも出来ますですよ。葉月はその為に勉強しましたから」

「なんの勉強だ！？ とは聞かなかつた。机の上においてあったご主人様とのお付き合い第八章を見れば大体のことはわかつたからだ。」

「……普通に宗助でいい。様付けもいらない」

「では、宗助さんでよろしいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

「わかりました」

「言うと、葉月は深々と頭を下げて一言、

「ふつつかものですが、今後ともよろしくお願いします。宗助さん」

「……」

こうして、宗助は葉月と出会った。

この先、葉月と出会ってしまったせいで宗助の身に色んな災難が降りかかるが、この時の宗助はそんなことまだ知る由もなかった。

「それでは、まずはご主人様にご奉仕を……」

「何のご奉仕だ!!」

宗助のこれからは前途多難なようだった。

「宗助さん、洗濯物が溜まっていたら出しておいってくださいね」

「宗助さん、お台所の洗剤が見当たらなかったので帰りに買ってきてください」

「宗助さん、今日は和食と洋食どちらがいいですか？」

……なんだこれは？

宗助の胸に去来したものはこの現状がよくわからないということだけではなく、どうしてこういうことになったのだろうか？ という疑問だった。

のんびりとした朝、いつものように規則正しく目覚め「ふわああ」とあくびをしながらリビングのある階下に降りてみると可愛らしいフリルのついたエプロンを着用した（巫女服は標準装備）葉月がパタパタと走りながらもとい、走っているように浮かびながら忙しなく働いていた。

「あ、おはようございます宗助さん」

「おはよう、葉月」

なぜかエプロンを纏っている葉月にそれをどこから用意したんだ？ と言いたいのをぐっと堪え軽く朝の挨拶を終えると、ご丁寧なテーブルの上に置いてある新聞紙に手を伸ばす。

「相変わらず世の中は平和だな」

そんなことを呟きながらのんびりと朝のひと時を過ごす。
すると、

「ふん、ふふん、ふーん♪」

とてもご機嫌な様子で葉月があちらこちらへと駆けていた。

「……」

新聞を読む手を止め、テレビのリモコンに手を伸ばし、いつものようにテレビを点ける。テレビの向こう側では雨の中だというのに満面の笑みを浮かべたお天気キャスターが元気にリポートしていた。「あっちも元気ならこっちも元気だな」

聞こえたのか聞こえていないのか知らないが葉月は「忙しいですね」と言いながら家事に精を出していた。

どういうわけか葉月は幽霊のくせに物に触れることが出来るらしく、雑巾を片手に窓をきれいに磨いていた。宗助の目の前では掃除機が勝手に動いていて、奥のキッチンでは包丁やら食器類が浮かびながらまるで意思を持っているかのように自由自在に動き回っていた。

一言で言えば童話とか絵本の中の世界、現実において考えてみればそんなことが起きるわけではないし、あったとしてもせいぜい掃除機が勝手に動くぐらいのものだ。

葉月は自分の能力、つまりはポルターガイスト現象を使って家事をしていた。

こんなもの他の人間に見られたなら発狂するか、霊媒師を呼ぶかするものだったが、とりわけ宗助はこういったことに馴れており、それを実行している人間も目の前で忙しそうにしているのを見ているため別段何かを言うようなことはなかったが、やっぱり現実にくいいうことを行われると正直どう対処していいものか、という気持ちになった。

「宗助さーん、早くしないとご飯冷めちゃいますよ」

「あ……ああ……今行く」

と宗助を呼ぶ声の一つ、

のっそりとソファから立ち上がるとダイニングに向かう。その間にキッチンのほうから腹の空くようないい匂いがこれでもかというぐらいに漂ってきていて余計に鼻腔をくすぐる。

ぐう、となるお腹はとても正直で腹が減っては戦が出来ぬと

いうことを体で表しているかのようにだった。

それにしても、どうしてこうなったのだろうか？

まあ、一言で言ってしまうえば自分で同居を認めたのだから彼女に文句を言うのはお門違いだというものだ。それは頭の中でわかるのだがそれにしてもこんな新婚さんみたいな状況になるなんて思っても見なかった。

「宗助さん、今日はいいい天気になりそうですね」

「……」

「あ、宗助さん、今日のは腕によりをかけて作ってみました」

「……」

宗助は黙る他無かった。

とりあえず、文句というか言いたいことは山ほどあった。ただそれを言ってしまうと機関銃のように溢れ出すのは一目瞭然なのと、せっかく作ってくれた朝ごはんが冷めるのがいやだったのも手伝ってそれを言うのをぐっと堪えた。

が、

「はい、宗助さんはご飯これぐらいでよかったですか？」

「……ああ」

何気なく返事をしてしまったがそれを流してしまうほど宗助は甘くは無かった。

「なあ、ちょっといいか？」

「はい、なんでしょうか？」

「色々といいたいことがあるんだが、きつとそれを言うときりが無いから敢えて一つだけ言わせてくれ」

「はい？」

「何やってんだ？」

「え？ ご飯を盛り付けてますぞ……あ！ も、もももしかして、朝はパンのほうがよかったでしょうか？」

「いや、俺はご飯派だ。じゃなくって、なんでこんなことをしてるんだ？と俺は言いたいんだ」

「え？ 何か粗相をしましたでしょうか？」

「粗相もなにも、お前は幽霊だろう。なんでこんなことをしてるんだ？」

その宗助の質問に葉月は返答に困っているようだった。

「第一、俺はこんなことをしてくれと頼んだ覚えはないし、される理由も無い」

「はううう……」

葉月は目に見えてわかるほど落ち込んで見せた。そんな姿に少し罪悪感を覚えはしたものの、それでもなんでこんなことをしているのかがまったくわからない以上追求の手を緩めることは出来なかった。

「何でだ？」

出来るだけ優しく言っているつもり（本人はそう思っている）だが、側からみればどこからどう見ても一方的に尋問しているようにしか見えない。

「……宗助さんはこういうのはいやですか？」

「は？」

「いえ……せつかくこうしてお側に置いていただいているのに何もしないわけにはいかないと思ひまして、こうして宗助さんの身の回りのお世話をさせていたたくことでご恩返しをと思ひましてです」

「ご恩もなにも成り行きでこうなっているわけなんだから別に普通にしててもいいと思うぞ。それに俺はこういうことをされなくても大抵のことは一人で出来るし、お前だっていやだろ？」

「え？ い、いえそういうことはないですけど……」

「俺の祖母さんが俺の為に世話をしてくれて言い残したのかもしれないけど、別に俺はそこまでしてもらうことはない。それにお前との付き合いもその鎖が外れるまでだしな」

「そうですか……」

殊更寂しそうに宗助のご飯をそっと置くと葉月はその場だけに影

が差したかのようにずーんと暗くなった。

「……」

「……」

「……」

「……」

「あのさ」

「……はい」

「そこでそんな風にされているとご飯が食べ辛いんだが……」

「……いえ、葉月のことは放って置いてください。葉月のことはいないものと思って食べてください。あ、でも、幽霊なんだから最初からいないも同じですよ。あはははは……」

「……」

ずず、と味噌汁をすすする音だけが響き、この場が明らかに尋常じゃないくらいに静かだということを知らしめられる。

葉月は葉月で「葉月なんてただの幽霊ですから……気にしないで下さい……」とぶつぶつ呟いているし、対する宗助は出来るだけ気にしないようにご飯を黙々と食べようとする。

そうすること五分、もちろん、二人の間に会話なんて無い。

宗助は温かいご飯食べながら思った。

面倒くせえ……と、

しばらくお互いに黙っていたが、この現状に耐え切れなくなった宗助が観念したかのように首を振った。

「ああ、わかった、お前のしたいようにすればいい。俺もこれ以上は何も言わない。ま、お前とのこの生活もその鎖がなくなるまでだ。それまでは好きにすればいい」

「ほ、本当ですか!? 宗助さん!!」

「ああ、だが、その鎖がなくなるまでだからな!! わかったか?」

「はい!」

どこからどう聞いてもぶっきらぼうな言い方にしか聞こえない言い方だったが、葉月はそれをまったく気にすることも無くぱつと顔

を上げるとまるでお日様が差したかのように明るい笑顔を取り戻していた。

本当になんか調子狂うな……。

宗助のそんな思いは温かい味噌汁と炊き立てのご飯を前にすると知らぬ間にどこかへ消えてしまった。

シーン2 Gショック 黒いあいつの襲来

シーン2 Gショック 黒いあいつの襲来

なし崩し的に始まった葉月との生活だったがこれが大変だった。
葉月はどういうわけか幽霊のくせに怖がりなようで何かあれば「宗助さ〜ん!!」と飛んでやってくるのだ。それも泣き顔で。

その度に今度はなんだ? と思いつつもその重い腰をあげる。

「そーすけさーん!! 助けてくださ〜い!!」

「……今度はなんだ」

リビングのソファに腰をかけて平和な日常を過ごそうとしていた宗助だったが、今日もやっぱりか……と言いたげな顔を浮かべながらゆっくりとその重い腰をあげた。毎度のごとく同居人である幽霊がどたばたと騒ぐのも宗助にとってはもはや日常になりつつあった。

「宗助さん宗助さん! 奴が出ました! 奴が……奴があ!!」

「うるさい!!」

「あうう!!」

絶対に美少女がしてはいけない顔をしながら、全力でこちらに向かってこようとするのを脳天割りで制する。それにしても、こういうときばかりはこの力も捨てたものではないなんて思う宗助だった。

「そ、宗助さん……葉月のことお嫌いですか?」

「もう少し言動がまともならミジンコに対するぐらいの興味は持てるかな」

「……じゃあ今はどのぐらいの興味なんだろうかね」

涙目で抗議してくる幽霊を無視しながら話を戻してやる。

「……で、何が出たんだ。幽霊か?」

「あう! 幽霊さんが他にもいるのですか!? どこですか、どこ

にいるのですか!? それならば一刻も早く成仏していただかなくては! なぜならば、他に幽霊さんがいらっしやると葉月が宗助さんとキャッキャウフフ出来なくなってしまうです!!」

「……まずはお前から成仏させたほうがいいよな絶対」

宗助は一気にげんなりした。しかし、放っておいてもろくなことにならないことを既にその見に感じている宗助は、じたばたあたふたと忙しそうに動き回るバカを制するとうまく本題に入ることが出来た。

「それで朝から騒々しく騒いでいるけど一体何があった?」

「ああそうでした! こんなところでキャッキャウフフしている場合じゃありませんです! 出たんです奴が!」

「ああ、わかった、わかったから離れろ! 顔が近い顔が!」

こちらがわずかでも隙を見せようとすれば目の前の幽霊は一気にこちらへと接触を凶ろうとしてくる。それはまさに乗り移ってやろうかあ!? とでもいいいたげなぐらいの勢いでちよつとばかり怖い。慌てふためく葉月をなんとかだめ、深呼吸するようにすすめる。
「はぁ、ふう、はぁ、ふう——ごほつごほつ……すいません……むせました……」

「……深呼吸も落ち着いて出来んのかお前は……」

ジト目で横の幽霊を見やる。よくやく落ち着いたようで呼吸を整えていた。少なくとも、幽霊に深呼吸が必要なのかどうかは怪しいが……第一、すでに死んでるし。

そんなことをどうでもいいことを思いながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「宗助さんと話していると時間が経つのも早いんですね」

「……お前が話をややこしくしてるんだろうが。で、何が出たんだ?」

「Gです! Gが出たんです!」

「ああ! だから顔が近いって!」

グイグイと顔を寄せてこようとするのを必死で引き剥がしながら

話の続きを促す。

「ところでGってなんだ？」

「……Gとはかつてこの世界に降臨した悪の帝王です。その姿は漆黒の闇よりも黒く、その理想的な体つきはいかなる狭い場所にも入り込むことができ、その脚力はどんなアスリートよりも早く、その動きで歴戦の勇者たちの攻撃をかわし、なおかつその圧倒的な存在感で相手に戦う気を失わせる。そして極めつけは飛びます！ 奴は自身の身に危険が迫ったときにその身をもって体当たりをかましてくるんです！」

「……つまりはゴキブリが出たってことか」

「ああああ！ 宗助さん！ その名を、その忌まわしい名を口にしていけません！ こうしている間にも奴は葉月たちにどんな攻撃を仕掛けてやろうかと虎視眈々とその機会を窺っているはずです。ほら、今もその隙間からこちらを窺っているに違いありません！」

「だからなんで寄ってくるんだ！」

軽く小突きながら引き剥がしてやる。葉月が密着するたびにその……なんていうか柔らかいものが……ふにふにと当たって……なんともいえない気分になりそうになる。つーか、幽霊のくせになんでこんなに柔らかいんだろうな……。

「宗助さん、これは我々人類と奴らとの戦争なんですよ。生きるか死ぬか二つに一つ。奴らを倒さなければ我々に未来はないんです！」

どうでもいいことをもってもらしく講義するが、どうにもバカらしくて聞いていられなくなる。たかが、ゴキブリ一つで何をそこまです……。

「んで、どこにいるんだ？ そのゴキ……じゃなかったGとやらは」
危うく奴の名を出してしまうところだった。ここで奴の名を出してしまったらまたこの面倒くさい奴が騒ぎ出すかもしれない。そう思うと迂闊に名前を呼ぶことさえ憚られた。実際に危うく名前を呼びそうになると葉月にキッと睨まれてしまった。そこまで怖いのだろうか……。

「Gはですね今キッチンの冷蔵庫の奥に潜んでいます。先ほどお料理をしようと思って近づいたら奴がその後ろに隠れるのを見ましたですから」

「ふーん、となるとGをおびき出さないと倒せないということか」

「ええ、奴はとても狡猾で中々姿を現さないです。なにより人の気配に敏感で人が来たとわかると一目散に隠れてしまいます。ゲームに出てくるメタル系モンスターよりも厄介です」

「まあ、メタルなんかを倒せば経験値が跳ね上がるんだろうが、生憎とGを倒しても大した経験値は手に入らないと思うぞ」

「それはわかっています。しかし、葉月にとっては経験値よりも奴がこの家に存在していることが我慢ならないのです！」

葉月にしては珍しく攻撃的な発言だと思った。何がそこまで彼女を奮い立たせるのだろうか。

「ま、それはいいとして、対策はあるのか？」

「はい、それは抜かりなく。これをご覧下さい」

そう言って一つの紙を取り出した。いや、正確には紙というよりは紙の束だった。

「これは？」

「新聞紙ですよ宗助さん」

もはや質問するのもどうかと思うが、何も質問したのはその物体に対してではない。それで一体何をしようかということに疑問を感じたのだ。

「いや、それは見ればわかる。見たまんま新聞紙だな。そうじゃなくてこの新聞紙を使って一体何をしようっていうんだ？」

「え？ いやですね、宗助さん。これは奴らと戦うために作り出された兵器、つまりは我々にとっての希望になるんですよ」

「……希望？」

うーん、よくわからない。まあ、こいつの言うことはいつもよくわからないことばかりなのだが、今回ばかりは輪をかけてさっぱりだった。

不思議そうな顔で見る宗助を置いて葉月はその新聞紙をくるくると丸めだした。

「出来ました！　これが我々の切り札、SBS－01です！」

「なんかものすごく格好いい名前だな！」

ババーンと効果音がつきそうなぐらいにSBS－01（新聞紙一号の略らしい）高々と掲げ威厳たつぷりにポーズをとっていた。その姿はまるで勝利の女神が旗を掲げて民衆を引き連れているあの有名な絵画のようにさえ見える。

「で、そこからどうするつもりだ？」

「……」

掲げたまま固まっている葉月。もしかして、この後の展開をまったく考えていなかったのだろう。ま、普段の言動があれな葉月ならありえる。そう思っただけ息をついた。

しばしの逡巡の後、葉月は「どうぞ宗助さん」と、うやうやしくSBS－01を宗助に手渡ししてきた。

「……どういふことだ？」

「それはですね、宗助さんにGを退治する重大な任務を与えようと思ひまして」

「……だからってなんで俺なんだ？」

「……えへへ、だって怖いんですもの」

すば——ん！！

「あうう！」

ゲームだったら間違いなくクリティカルヒットものの一撃を繰り出してやる。材質が新聞紙で出来ているせいか、一撃を繰り出したときのヒット音がやたら小気味よく感じられた。

「何言ってるんだ！　お前が用意したんだったらお前がやれ！」

「後生です！　後生ですから　！　なんとか葉月の、いえ、人類の平和をなんとか守ってください！！！」

「スケールがでか過ぎんだよ！　なにゴキブリ一つでそこまで怖がってるんだよ！」

「ああああ！ 宗助さんその名を口にしてはあ！！」

飛びついてきた葉月に反応できず、そのままなだれ込むようにして床に転がってしまった。それはまさにアクション映画なんかで敵の攻撃をかわそうとして仲間を助ける主人公のような動きだったが、実際にはそこまで格好よくはない。

その拍子に葉月とかなり密着してしまってさっき迫ってきたときよりも顔が近かった。それはもうあと数センチでお互いが触れ合ってしまうぐらいの距離だった。

「……………」

お互いに自分たちの置かれている状況を理解し、とっさに離れる。そして何事もなかったかのように振舞おうとするのだが、どうにも心臓がバクバクと鳴っていてどうしようもない。

「……そ、それでですね……引き受けてもらえますでしょうか？」

「え……あ、ああ……わかった。何とかするからお前はどこか安全な場所で待ってろ」

「はい……」

なんか微妙な空気のままよそよしく距離をとる。

……なに意識してんだよ俺は。なんとなく自分で自分を殴りたくなった宗助だった。

「えーっとそれでどこにいるんだ奴は」

独り言を呟きながら宗助は今や戦場と化したキッチンへと足を踏み入れる。

ゆっくりとゆっくりと、自分自身の気配を最大限に殺しながらGが潜んでいそうな場所へと向かう。

片手にはSBS-01、葉月いわく人類が奴に対抗できる最後の希望らしい。

「……それにしても面倒なことになったな」

やれやれと頭を掻きながら宗助は自分の甘さに落胆しそうになる。一つだけ反論させてもらおうが決して葉月とあんなことになったか

らじゃないぞ。早く奴を退治しないとまたギャーギャー騒ぐからだ！
それだけだからな！ とは宗助の言だ。

そんな彼の心情はともかくとして、宗助は先ほど葉月が言っていた冷蔵庫の隙間を覗いて見る。さすがにあれから時間が経っているせいで奴ことGはすでにその場所から姿を消していた。

どこに行った？ 奴の移動速度は尋常ではないが、あれだけの時間だったらまだどこかに潜んでいてもおかしくはない。

冷静に分析を繰り返しながら宗助はくまなくGが隠れそうな場所をそれこそ虱つぶしに探していく。

けれども、その姿は一向に見つけることは出来なかった。

諦めてその場を離れようとする「あううう！」と、リビングのほうから聞きなれた叫び声が聞こえた。

一目散に声のしたほうへと足を向けると、葉月が黒い物体に追い掛け回されていた。

「……大丈夫か？」

「そ、そそそそ宗助さん！ 助けてください！ 奴が、奴が葉月を狙ってます！」

「見ればわかる。それよりもなんか楽しそうだな」

「楽しくなんかないですよ！ なにを見てるんですか宗助さん。早く助けてくださいです！」

「助けるつつつてもな……そう飛び回っていたんじゃ退治しようがないぞ」

確かに宗助の言うとおり、地面に止まっている物体ならばともかく、飛び回っている物体を叩き落すというのはかなりの技術が必要となる。物理的に考えてその飛行している物体よりも速い速度でなければその物体を叩き落すことは出来ないし、何より相手が自由に動き回るならばなおさらだ。どう考えたって無理な話だ。

しかし、宗助はやれやれといったもののように首を振ると手にしていたSSS-01を握り締める。

そして……。

すば——ん!と小気味のよい音が響き渡る。ついでに「あう!」という声までついてきた。

飛び回るGを狙ったつもりがどういうわけか葉月のほうにヒットしてしまっただけらしい。

「——ちっ、仕留めそなたか」

「そ……宗助さん……それは葉月のことでしょうか……」

今にもあっち側へと逝きそうな葉月をよそに宗助はもう一度SB S-01を振る。

パシィ!

「ひい!」

ビュンツ!

「ひゃう!」

ビュオン!

「ノオオオオオ!」

「すばしっこい奴め。じっとしてろ!」

「嫌です!止まったら葉月は殺されちゃいます!」

「大丈夫だ。お前はすでに死んでいる。だから何も気にするな!」

「気にしますですよ!死に方がひでぶ!とかあべし!とか嫌なのですよ!」

もう二人にとってはなにがなんだかわからなくなっていた。宗助もといGに追われる葉月、その葉月もといGを仕留めようとする宗助、互いに本来の目的なんか忘れて走り回っていた。

そこから一時間後……。

「……はあ……はあ……はあ……」

「……ひゅう……ひゅう……うう……」

大の大人が二人そろってリビングで仰向けで倒れていた。

「……なあ……俺は一体何をやってるんだろうな……?せつかくの休みだったのに……」

「……それは葉月も……同じです……結局……奴を逃がしてしまい

ましたです……」

せっかくの休日は何をしていたのかよくわからないまま過ぎていこうとしていた。

「……うおおお……体がいてえ……つか、レポート仕上げなきゃいけないのに……」

「……そ、宗助さん……ファイトです……ううう……」

そしてその日は二人揃ってぐったりしたまま過ごすこととなってしまった。

シーン3 オカルト研究会の一存1

国立白峰大学。ここにはこの大学に通う者であれば誰もが知っているある一つの噂がある。

白峰大学のサークル小屋、そこにはいくつかのサークルの部室が配置されており、各サークルの部室には野球部と書かれていたり、サッカー部なんて定番の運動系のサークルの他に落語研究会や天体部なんていう割と本当にあるんだ………というようなサークルまで様々なサークルがそこらかしこに乱立していた。

しかし、その中にあっても一際、異彩を放つサークルがあった。そこは、大小、様々なサークルが立ち並ぶサークル小屋の中にはなくその外れにポツンと取り残された形で建っていた。

大学の離れのさらに最果てに存在する謎のサークル、人々のそのサークルに対しての感想を聞くと、

「あそこはヤバイ……悪いことは言わないから近づくな」

「あまり関わらないほうがいいよ……あそここの近く通るたびに変な鳴き声みたいなの聞こえるんだけど……一体なんなんだろう？」

「俺、見たんだ。あの中になんだか白い人影みたいなのが立っているのをさ。他の奴も見たって言ってた」

「なんだかいつも怪しい研究してるって噂だよ。あ、友達から聞いた話なんだけど、あのサークルの部室に入った人って、中に入ったつきり出てこないんだって……」

なんて感想とも噂ともつかないそれぞれのお言葉を頂戴した。

噂の元凶ともいえるそのサークルの名はオカルト研究会。活動内容、在籍する人間、その目的全てが不明。

白峰大学内でその存在を知らないものはいないとまで言われる謎のサークルだった。

今回はそんなオカルト研究会についてのお話。

「おつかれさまーっ……す？」

常のやる気がない感じでガラガラと（部室はプレハブで引き戸）

部室の戸を開けた宗助はそこで目にしたものに困惑を隠せなかった。

「あら、宗助君いらっしやい」

「お疲れ様です鳴海さん。と……杏さん？」

語尾がなんで疑問系？　と思った人もいるかもしれないが、ちゃんとした理由がある。

部室の中には二人の女性がいた。一人は如月鳴海、年齢は宗助の

きとらぎなるみ

一つ上でこのサークルの副長ならびに運営を兼務している。見た目はおっとりとしたお嬢様のような風貌でこんな陰気なサークルよりもテニス部とか弓道部なんかの爽やかな部活にいきそうな人だった。

そしてもう一人……この、もう一人が宗助が困惑した理由である。

そのもう一人の女性は部室の奥にあるデスクの前に座っていた。

デスクの上にはハイスペックなパソコンとなぜか和服を着たおっぱ頭の人形が置いてあった。それと、一升瓶。

「……杏さんまた壊れてますね」

「ええ、杏ちゃんまた壊れてますね」

いつもニコニコしている鳴海も困ったような顔を浮かべながらおっとり呟いた。この人の場合には本当に困っているのかどうか判断しづらい。

視線をデスクの前に座る人物へと向ける。だが、その人物は反応することなく、ただただ、呆然と空中を見ていた。

……返事がないただの屍のようだ。ではなく、その姿は真っ白に燃え尽きていた。

「……久しぶりに来るなりこれか。まったく人を呼び出しておいで相変わらずだなこの人も」

またか……と、頭を抱えそうになるのを必死に堪えながら宗助はなんとか彼女の意識を現実に取り戻そうと試みた。

「ほら、杏さん起きてください。何があったかは知らないですけど、どうせまた男に振られたかなんかなんでしょ？　いつものことじゃ

ないですか。いまさら気にすることでもないですよ」

「宗助君、それはいくらなんでも言いすぎではないでしょうか？」

せめて、杏ちゃんは単に男を見る目がないって言ってあげたほうがまだ優しいと思いますよ」

「……鳴海さん、それフォローになってないです」

宗助はやれやれと首を振るとデスクの前に置いてある応接用のソファーにどっかと座った。

「宗助君、いつものようにコーヒーでいいですか？」

「はい、すいませんがお願いします」

そう言う鳴海は気立てのよい女中のように給湯室へと向かった。ソファーの前にあるテーブルの上に載っていた雑誌を捲りながら時間を潰そうとして気づく。本の丁度中盤辺りだろうか、ご丁寧にページの端のほうが三角に折られていてすぐにお目当てのページを開けるようになっていた。こんなことをするのは大抵一人しかない。その雑誌の表紙には今年こそモテ女になる！！というキャッチコピーが書いてあったのを見ると予想通りというか、それほどまでに状況はひっ迫してるのかなあ……と心配せざる終えない状況になってしまう。ちなみにそのページはこれで完璧な女になれる！という特集の元、男に尽くす女がモテるだの、目指せ肉食系女子とか、現代にはびこる草食系男子が見るとウワァ……とドン引きしそうなことがたくさん書いてあった。

いつも思うが、杏先輩愛読のこの雑誌はさっさと廃刊になるべきだと思う。色んな意味で精神衛生上よくないことばかりが書いてある気がしてならない。

ポンと手にとっていた雑誌を放り投げると一言、

「杏さん必死だな」

と、呟いた。

そんな宗助にとっては暇つぶしにもならないことを考えていると給湯室にコーヒーを用意しに行っていた鳴海が戻ってきた。

「杏ちゃんも今年こそは私に合う男を見つuckerんだろ！って意気込

んでましたからね。はい、お待たせしました」

「ありがとうございます鳴海さん。ま、杏さんそう言いながら毎回撃沈してるんですけどね」

「そうですね」

二人して放心状態の杏を見る。相変わらず真っ白い抜け殻と化した女が一人鎮座していた。

意識があっち側に行ってるのをいい事に二人に言いたい放題言われているこの女性、名前を東雲杏しのめあんずという。年齢は鳴海と同じ（彼氏いない歴、年齢に比例）でこのオカルト研究会のサークル長を務めている。外見は街を歩けば十人中十二人が振り返りそうな外見とそのグラビアアイドル顔負けのスタイルの良さが特徴的だ。ただ、中身に関しては壊滅的といえるぐらいに破綻しており、常々宗助の頭痛の種になっている。

黙っていればいくらでも男なんて寄ってくるだろうに……天は二物を与えず、という言葉があるが、まさにそれをその身で体現しているような女性だった。

「鳴海さんも大変ですよ。杏さんみたいな人といつも一緒にいるなんて」

「あら、そうでもないですよ。杏ちゃんはいつもはこんな感じだけどとても友人思いで優しい性格の持ち主ですから」

「そんな優しい性格の持ち主だったら『あたしが呼んだら五秒以内に来い！』なんてことは言わないと思いますよ」

呆れ果てた様子で言つてのけると「杏ちゃんらしいですね」と鳴海はそう言いながら宗助にコーヒーを差し出してきた。

唐突だが、このオカルト研究会について少し説明しようと思う。

オカルト研究会は発足してからわずか三年程しか経っていない新参のサークルだった。サークルといってもメンバーはサークル長である東雲杏とその補佐的役割（補佐なんていいながら実質、運営を担当しているのは鳴海）を担っている如月鳴海。そして雑用係に近い存在の宗助の三人で構成されている。これではサークルどころか

同好会というのも憚れるぐらいの少数規模だ。

ただ、人数が極端に少ないのには訳がある。奇怪なサークルであることも人数が少ない理由の一つではあるが、それでも杏と鳴海のルックスが飛びぬけた二人とお近づきになりたいなんて連中も確かにいた。しかし、サークル長である杏がオーディションと称して書類審査から始まり面接、試験、果ては二十四時間耐久心霊スポットサバイバルなんていう近年のバラエティ番組でもやらないような企画で最終的には誰も残らなかったためこのサークルはたった三人になってしまったのだった。

杏いわく「無駄な人材はいらない」とのことだったが、仮に残ることが出来ても命の危険に晒されるサークルには誰も入ろうなんて者はいないだろう。命あつてのなんとやらだ。二人とお近づきになるよりも自身の安否のほうが大事なのだ。というわけで、説明終わり。ちなみに宗助がここににいるのにはまた別の理由があるが、それはまた別の話だ。

「それにしても杏さん俺に何の用なんですかね？」

「さあ、さすがにそこまでは私も聞いていませんでしたから宗助君がここに来た理由はわからないです」

「どうせ大した理由なんかないと思いますけどね」

差し出されたコーヒーを飲みながら向かいに座った鳴海と世間話なんかをしながら杏の復活を待つことにした。

「あたしはこれから仕事に生きることになりました！」

真っ白になった杏が謎の宣言とともに復活したのはそこから約一時間後のことだった。

「あら、杏ちゃんったらこの間もそんなことを言っていないでしたか？」

「鳴海、あたしの信念は臨機応変なんだ。だからこの間と言ってることが違っていても何にも問題はない」

「……その時点で信念もなにもないような気がするけどな」

「ああ？ 何か言った宗助？」

「いえ、何も」

「なんか言いたそうな顔してるけどまあいいや。それじゃあ仕事に生きることにしたあたしがしようとしていることを説明しようと思う」

杏は納得していない顔を浮かべながらもようやく本題に入ることが出来た。まあ、どうせ今回もろくな目には遭わないことは自明の理だ。

「今回はこの白峰市でも屈指の心霊スポットの調査に向かおうと思う」

「あら、楽しそうですね」

杏の言葉に鳴海が声を弾ませて賛同する。それを横目で見ていた宗助は安堵とも落胆ともつかないため息を吐いていた。

どうやら今回は心霊スポット巡りのようだ。どういうわけか宗助達が暮らすこの白峰市は全国でも屈指の心霊スポットが多い地域でよく怪奇現象が起きるというのを耳にすることが出来る。その原因の一端としては宗助の存在が心霊スポットを増やしているなんて話もあるが、真相のほうは定かではない。

サークルの活動が心霊スポット巡りなんて……と、思うかもしれないが今回はまだマシなほうだといえる。前回は廃病院でなぜか闇鍋をしたり、大学のグラウンドで謎の魔法陣を描かされて危うく警察のお世話になりそうな目にも遭った。その度に宗助はこの世ならざるものたちに「兄ちゃんたち何やってんだ？」と、不思議そうな目で見られていることをこの二人は知らない。

宗助の力のことはこの二人には秘密にしてある。

内容がまさしく杏の喜びそうな内容だけにカミングアウトした瞬間に実験材料にされかねないからだ。触らぬ神に祟りなし。これが宗助の信念だった。

「それで今回はどこへ取材行きますか？」

割と乗り気な鳴海に気をよくした杏は「よくぞ聞いてくれた我が

同志よ」と、言いたげに胸を張った。その拍子にこれでもかと思ひ主張の強い部分がわずかに揺れた。

「今回はこの大学の近くにある幽霊屋敷の調査に向かうと思う」

「幽霊屋敷ですか。そんなのありましたっけ？」

「あんたこの近くにある屋敷の存在を知らないの？ 歴史あるオカルト研究会のたとえ末席に位置する存在だとしてもそれぐらいは知っておいて欲しいものだよね」

やれやれと出来の悪い子供を見るような目な視線を送る杏にいつそ末席といわずに除籍にしてほしいと願わずにはいられない宗助だった。

「ま、勉強不足なあんたのために優しい杏さんが教えてあげようじゃないか」

「別に知りたくもないんです」

「よしよし、勉強熱心な子はお姉さん好きだよ」

もはや会話にすらなっていないかった。

「そこはずっと昔からある屋敷なんだけど最近になって幽霊の目撃情報が急増しててね、夜になったら悲鳴が聞こえるとか、なんかもすごい物音がするとか、白い人影が見えるとか、誰も住んでないはずなのに人の気配がするとかいろんな噂が出てるんだよね。これはもう調査するしかないでしょ！」

「近い近い！」

興奮しているのか鼻息を荒くさせながら顔を寄せる杏に宗助はわずかに目を逸らしながらただただ「はあ……」とだけ呟くのが精一杯だった。

「よし、鳴海！ 急いで調査の準備だ。善は急げだ！」

「はい、杏ちゃん」

また面倒なことになった。けれどもここで何か言おうものならよりもっと面倒なことになる。それにしてもどこかで聞いたことのあるような話だ。と、宗助は思う。この大学の近くには確かに高級住宅街があるため屋敷の一つや二つあってもなんら不思議ではない。

しかし、類まれなる力を持つ宗助がそんな怪しい屋敷の存在に気づかないわけがないのだ。いくら考えてもやっぱりそんな場所あったかな？ と考えてしまう。だが、いくら考えても答えなんて出てくることもなく、宗助は仕方ないと覚悟を決めるといつものようにため息を吐きながら二人の後に続くことにしたのだった。

シーン3 オカルト研究会の一存2

杏の言っていた幽霊屋敷は思いのほか大学から近くて徒歩で十分ほどの所にあった。

外観は堅牢な塀と絡まった蔦がおどろおどろしい雰囲気醸し出し、外から見える庭は草が生え放題で長い間手入れをされていないことが一目瞭然でその中にポツンと立っているそれなりに大きな屋敷というには少しばかり小さい建物はもともとは真っ白な外観だったのだろうが、風雨にさらされ続けたせいで白というよりは灰色に近い色をしていた。朽ちた鉄格子はさらにそこがまともではない場所なのだと物語っているように見える。そして……というよりもそこはまさしく、

「俺ん家じゃねーか……」

ボソッと呟いた声はどうやら二人には聞こえなかったようで「ここなんですわね」。「うん、ここがこの辺り一帯でも屈指の心霊スポットだ」「それじゃ早く入りましょうか」まるで流行のスイーツが食べられる店の前にいる女の子のように会話している二人だったが、そんな甘いものではなく苦い思いをする羽目になることは明確だった。もちろん宗助がだ。

「あの、入るの止めませんか？」

「何で？　ここまで来て今更引き返せるなんて思うのかいあんたは。まったくオカルト研究会の一員ともあろう者がこの程度のことですぐくなんて情けない」

「あらあら宗助君はこういうのは苦手ですか？」

苦手ではない。むしろそうだったのが見えてしまう分得意といえど得意なほうだ。だから心霊スポットで闇鍋をしようが珍妙な魔法陣を描かされようがなんとも思わない。だが、今回ばかりは状況が違う。

葉月の存在がこの二人にというよりも、杏にバレると何をされる

かわからない。葉月が見えるということは宗助がそういった人間だということがバレてしまう。そうなると必然的に宗助自身が人体実験の材料にされてしまう。それだけはなんとしても避けなければならない。

「でも、もしかしたら誰かが住んでたら不法侵入になるんじゃないですか？」

「誰がこんな廃墟に住むって言うのよ？」

「すいません、その廃墟に住んです。」

「いやでも、万が一っていうこともありますし……」

「万が一だか金田一だか知らないけど入るったらは入る！　これは部長命令だよ」

「そういうことですので行きましようか宗助君」

「……はい」

二人のプレッシャーに圧されとうとう宗助は観念せざる終えなかった。

中に入ると珍しくシン、とした空気が漂っていた。いつもなら大抵玄関の扉を開け放ったときに主人の帰りを待ちわびていた愛犬のような出で立ちで奴がやってくるはずなのに、どういうわけか今日に限ってはそんなことはなかった。

幸いといえば幸いだったのかもしれない。飛び込んできた瞬間いつものように反射的に脳天割りを叩き込んでしまうからだ。ちなみに中に入るときはさすがに鍵を取り出して入るわけにもいかず、杏が青い制服を着た方々に見つかったら大変なことになる特技で鍵を開けた。

「ふむ、噂では誰も住んでいないってことだけど外の見え目は違って案外きれいなもんだねえ。もしかしたらあんたの言うとおり誰か住んでるのかもね」

「だから言ったじゃないですか。今はたまたまこの住人がいなくて助かってますけど出くわしたら警察ものですよ」

とはいっても、その住人が杏の目の前にいるためそんな心配など皆無に等しかった。

「あら、大きなのっぽの古時計ですね」

「家具なんかも置いてあるんだ。あたしこういうのはよくわかんないけど、どれも高そうなものばかり置いてある」

まじまじとまるで住宅展示場にでも来ている家族のように辺りを見回す二人。宗助も二人と同じように怪しまれないように辺りを見回すふりをするが既に心の内はそれどころではなかった。

……葉月どこにいる？ 出来ればそのまま出てこないでくれと願う。

「雰囲気はあるんだよね。何かいそうな、ね」

「な、何かってなんですか？」

「ん、そりゃあ幽霊とか」

「幽霊ですか……」

「うん、幽霊」

そりゃいますよ。だって俺、幽霊と一緒に住んでいますから。なんて思いながらも「そんなのいたら怖いっすね……」と、なにも知らない人間を装うので精一杯だった。

「杏ちゃん、アレを試してみたらいかがですか？」

「アレか。そうだねえ丁度いい機会かもしれない。もしかしたら思わぬ収穫があるかもしれない」

「アレ？ アレってなんですか？」

「ふっふっふ、アレとはね……」

まるで子供が新しいおもちゃを友人に自慢したくてたまらないような顔を浮かべながら肩にかけていたポストンバッグを下ろす。その拍子にドスン！ と、見た目以上に重そうな音がした。一体何が入っているんだろう……嫌な予感がする。そう宗助の第六感が告げていた。

「うーん、とどこ入れたっけかな？ これじゃないし、これでもない」

杏がガサゴソとボストンバッグの中を覗き込むようにしながら探している。明らかにその容量以上のものが出てきた。メガネだった。ネコ耳のついたカチューシャだったり、得体の知れないどこかの民芸品だったり、果ては大きさ長さともにどうやって入ってたんだった！？と、言いたくなるようなワイヤーカッターまで出てきた。

「……おっかしいな。確かにここに入ってるはずなんだけどな」
不思議そうな顔をする杏に不思議なのはそのカバンのほうだよ、と、言いたくて仕方なかった。

「あ、あったあった。じゃーん！ 幽霊探知機」

杏が肩から提げていたボストンバッグから（青いネコ型ロボット風に言いながら、もちろんダミ声）取り出したものはパツと見た感じでは割と普通そうなものだった。

「案外普通だな」

「何か言った宗助？」

「いえ、何も」

思わず心の声が漏れてしまったようだ、気をつけないと。

幽霊探知機なる不思議アイテムは大きさから言えばタバコの箱ぐらいの大きさで、その表面には昔流行った当たりつき自販機のメーターのようなものがついていて緑色のランプと赤色のランプがそれぞれ五個ずつ付いていた。それとアンテナ。

それにしてもまた変なの出したな。なんて思いながら興味なさげにしているとちらちらと視線を感じる。その視線の先へと目を向けると、

サッ、

目を逸らされた。

「……」

「……」

チラッチラッ、

視線を向けると、

サッ、

目を逸らされた。

「……」

……なんだこの茶番は。聞いて欲しいなら素直に言えばいいのに。仕方がないのでそれが何か聞いてあげることにした。

「……で、その不思議アイテムをどう使うんですか？」

「よくぞ聞いてくれた我が同志よ！」

「いや、よくぞ聞いてくれたっていうか、あんたがずっと聞いて欲しそうにしてたからだろうが！ ええ！？」

「……だってそんなこと恥ずかしくて言えない」

可愛い子ぶって視線を逸らす杏に宗助は、先輩じゃなかったら……女じゃなかったら……絶対にぶん殴ってやる！ と、固く誓うのだった。

ちなみに幽霊探知機（通称バケ探）の説明をすると、幽霊がいそうな場所に向けるとメーターが反応し、緑のメーターが反応するとここには幽霊はいないということがわかり、反対に赤いメーターが反応すると幽霊がいるということがわかる画期的なアイテムなのだ。レベルは五段階あって緑のメーターのレベルが上だと幽霊はいない安全な場所ということになり、赤のメーターのレベルが上だと幽霊がわんさかいるか、とんでもない悪霊がいるということになる。以上、バケ採取扱説明書より抜粋。

「よし、それじゃあこの家の探索を開始しようじゃないか。目的は幽霊の発見または捕獲。仮に幽霊がいなくても何らかの痕跡があったら知らせること。あたしと鳴海は一階を調べるから宗助、あんたは二階を調べてきて」

「わかりました」

「はい」

「あ、そうだついでにこれも持っていくといい」

「なんすかこれ？」

「これはね破理扇っていつてまあ見たまんまハリセンなんだけど、幽霊とかを祓うためにあたしが作った武器みたいなものかな。これ

で幽霊をぶっ叩いたら天に還すことが出来るって代物さ。ちなみに生きた人間に使うとその人間の魂が抜けちゃうから気をつけてね」

「……なんて危険な物を作ったんだあんたは」

こうして、げんなりとしながらお経だか梵字だかよくわからない文字が一面に書かれたハリセンを手に持ち、それぞれ二手に別れて探索をするようになった。

しかしある意味では好都合かもしれない。彼女達よりも先に葉月に会うことが出来れば一目につかないところで彼女達が帰るまでずっと隠れていてもらえばいいだけの話だからだ。

そうと決まれば否ではないが善は急げだ。即座に二階へと上がるというも葉月がいる部屋の前に立つ。

「葉月いるか？」

コンコンとドアをノックしてみるが反応はない。

「葉月いないのか？ 入るぞ」

一応、礼儀として一言声をかけてからドアを開ける。が、

「……ここにはいないのか」

部屋の中にはいつもどおり机とベッドがあるだけで肝心のその部屋の主がいなかった。ならばと思い自分の部屋を開ける。もちろん、自分の部屋なのでノックは無しだ。

恐る恐る開けると、

「くー、くー」

本来ならばそこにいるはずじゃない奴が気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「見つかったらどうするんだよ……」

幽霊なのでそんな心配もないのだろうが、宗助の気も知らず葉月は寝返りをうちながら寝言を言っていた。

「あう、宗助さん見てくださいきれいなお花畑ですよ」

きつとそのお花畑には絶対行っではいけないところだと思う。むしろ、まだ行きたくない。

「きれいですよねー、あっちには川原もあるみたいですよー。ちょ

っと行ってみましょうか」

うん、出来ることなら一人で行ってきてくれ。その先に行ったら帰ってくる自信がないから。

「それにしても誰もいないですね」

そうですね、いるわけないよね。

「そ、宗助さん！ そんないきなりだめです！！　だ、誰もいないからって急に……」

一体何の夢を見てるんだ！？　思わずドアの角に足をぶつけるぐらいに反応してしまう。

「そんな！！　みんな見てますから」

誰も見てねーよ！！　と、言いたかったが、言ったところで聞こえるわけもない。

「は、初めてなんで……優しくしてください……」

何してんだ俺！？　激しく狼狽する宗助。

「激しいです！！　激しいですうう！！　ああ！！！」

「だあー！！」

それが宗助の限界だった。

「起きろ葉月！！」

ビシィ！　と軽くデコピンを試してみる。普通なら幽霊である葉月に触れることも出来ないのだが、この時だけはこの異能の力があってよかったと思う宗助だった。

「い、痛いじゃないですか！！　何するですか？！」

「……いや、それはこっちのセリフだ。お前こそ俺のベッドで何してるんだ？」

「え、えと……宗助さんのお部屋をお掃除したら日差しが気持ちよくてつい、うとうとしてしまいました」

えへへ、へにゃつと表情を崩し話す葉月、くっそお可愛いなあ！　なんて思うわけ無く、もう一発デコピン食らわせようかな？　と思っていた。

「はあ……まあいいや。それよりもお前ここから一歩も出るな」

「え？　なんででしょうか？　も、もしかして監禁……」
「するか！」

イラッとしたので杏に渡された破理扇を食らわせてみる。

「あああ！　葉月フライハイしてます！　じゃなくてなんですかその危険な代物は！　本当に川原を渡りそうになりましたよ！」

「お前が変なこと言うからだろうが」

どっと疲れが押し寄せてきた。もういつそいつを二人の前に差し出してやろうかなんて思う。

「……宗助さんが何かよからぬことを考えているのですよ」
「気のせいだ」

「あっさりと否定するところがますます怪しいのですよ……」

「それよりもだ、実は今俺の先輩がこの家に来ている」

「あう？　宗助さんの先輩さんですか？」

「ああ、その人はここを俺の家だということとは知らない。そして俺の力のことやお前のことも話してない」

「どうしてでしょうか？　宗助さんがお世話になっている先輩さんなら妻として葉月もご挨拶しておきたいのですよ」

「……生憎とまともな人じゃないからな。あと、誰が妻だ」
ビシィ、とデコピンをおまけに付け加えてやった。

「それで葉月はどうすればいいでしょうか？」

額にどこから用意したのかわからない絆創膏をバツテンに貼りながら葉月が問う。

「それなんだがな……」
と、

「そーすけー、そっちはどうー？」

階下から例の問題の人の声が聞こえた。

「こっちは何もなさそうです。俺も今からそっちに向かいます。というわけだからお前はここでじっとしてろいいな？」

そう言い残してその場を後にしようとする宗助に背後から「……今の人誰ですか？」と、今まで聞いたことのない声が聞こえた。

「誰って、さっき言ってた先輩……」

宗助のその後の言葉は続かなかった。

何故なら……、

「宗助さん！ 今の声は女性でしたよね！？ 浮気ですか！？ 葉月というものがあらながら宗助さんは女性をこの葉月と宗助さんの愛の巣に連れ込んだというのですか！？」

ガー！ と、まくし立てる葉月。何が彼女をそうさせるのか、宗助には皆目見当も付かなかった。

「落ち着け！ さっき説明しただろ。あれは俺の先輩でまともな人じゃないんだ！ もし見つかったら俺もお前もどうなるかわからない。だからお前にはここでじっとしててほしいんだ」

「そんなこと言って葉月をいないものとしてその先輩さんとキャツキャウフフするつもりですか！？」

「そーすけくーん、杏ちゃんが早く下りて来いって呼んでますよ」

「宗助さん！ 先輩は一人じゃなかったんですか！？ ま、まさか三人同時プレイ……！！？」

「違うって言うてるだろーが！」

わたわたと人の話を聞かない葉月にいい加減宗助のリミットはブレイク寸前だった。

「それからそれから三人同時プレイの暁にはめくるめく愛のロンドが……させません、そうはさせません！ 宗助さんは葉月だけの宗助さんなんですから！」

「いいから人の話を聞けええええええええええ！！」

ゴッ。宗助、リミットブレイク。

「おおふ……お花畑が……ここは天国でしょうか……あ、雪さまご無沙汰してます……」

渾身の脳天割りを食らわせることでようやく葉月は大人しくなった。ただ、思いのほか威力が高かったのか一人だけ行っては行けないところまでお出かけなさっているようだった。

「……さすがにやりすぎたか」

「宗助！　なんか今ものすごい物音したけど大丈夫！？」

「宗助君、どうかしましたか？」

しまった……怒りのあまり二人がいること忘れていた。そう気づくも時既に遅し。とりあえずこの場を誤魔化すことにした。

「え、いやその……っか……なんですかその格好……？」

二人は頭にネコ耳をつけてメガネを着装、あと手に破理扇。どこかのコスプレ喫茶で今からバイトしますっていうノリだった。誤魔化す依然にツツコむところが多すぎて何から手をつけていいかわからない……なんだか全てがどうでもよくなってきた。

「え？　ああこれ、可愛いでしょ。あたしが作った見るぞうくんと聞くぞうくんだよ。これは幽霊が見えるメガネと幽霊の声が聞こえる耳ってことで作ったんだけど、あまり使う機会がなくなっでさ。で、今日ようやく日の目を見られたってわけ」

「デザインは私がしました」

そんな宗助の心情をよそに杏は聞かれたことは素直に答えるよい子のように答えるが、今だけは一言も喋らないでほしい気分だった。そんな楽しそうに答える二人にただ一言「ああそうですか……」と、答えるのが精一杯だった。

いや、待て、今なんて言った？

「……幽霊が見えるメガネと幽霊の声が聞こえる耳？」

「そうだよ、これさえあればどんな姿の幽霊でも見えるし、どんな幽霊の叫びだって聞き逃すことはない！」

そう宣言する杏に宗助は、

「あ、杏さん！　俺、杏さんはメガネ外したほうが可愛いと思います！」

なんて冗談とも誤魔化しともつかないよくわからない発言をしてしまった。いくらとっさのこととはいえ何言ってるんだらう俺……と、さすがの宗助も思った。

しかし、

「え！？」　……あたしメガネ外したほうが可愛いかな？　そっか……

…宗助がそう言うなら外そうかな」

「あらあら〜思わぬところでフラグが立ちましたね〜」

と、二人して意味深なことを言うと言とメガネを外してしまった。

結果オーライ？ 変な地雷を踏んでしまったことに宗助はまだ気づいていなかった。

「それで、さ、宗助」

「なんですか杏さん？」

「さっきから気になってたんだけど、その子誰？」

「え!？」

慌てて杏の指差すほうへと視線を向けると、そこには足に足枷を嵌めた巫女服の美少女がぐったりしていた。

「……そういえばあんたやたらこの家に入るの嫌がったよね？」

「そ、そうでしたっけ……」

「宗助君この家に人が住んでいるなんてことも言っていましたね〜」

「……いやそれはあくまで可能性の話で」

「宗助……あんた……」

まずい……バレた……。

「こんな美少女を鎖でつないで一人だけ楽しむなんて許せん!」

「……は？」

ナニヲイッテイルノダロウカコノヒトハ……？

思わず片言になってしまった。それぐらいに驚いた。

「宗助、こんな美少女とお知り合いなんてそれならそうと言ってくれればいいのに! あたしだってあたしだって……」

「あたしだって……?」

「美少女とキャッキャウフフしたいんだから!」

「重症だこの人!」

とうとう收拾が付かなくなりそうなのでそれぞれの秘密を明かすことにした。

数分後……。

「それじゃあ、にゃーって鳴いてみよっか？」

「にゃ、にゃー……」

「アカン、アカンでえ！ あたしのツボや！ 宗助この子お持ち帰りしてもいい!？」

「駄目に決まってるだろうが……」

宗助は疲れたサラリーマンのような表情を浮かべながら否定の言葉を述べた。ちなみに何をしているのかというと、杏が見に着けていた聞くぞうくんを葉月に装着させ「リアルネコ娘」なんて言いながら目をきらきらさせていた。どうでもいいがなぜに関西弁なのかは杏しわからない。

ぐったりしている葉月を起こした宗助は一階にあるリビングのソファーに座り今までの顛末を話した。二人は最初信じられないといった顔を浮かべていたが、実際にその目で幽霊を見てしまったことも手伝ってかなんとか信じてくれたようだった。

「ふーん、それでここにはづにゃんと一緒に住んでるってわけなんだ」

「まさか宗助君のお宅だとは知らず失礼しました」

「ちゃんと説明しなかった俺も悪いですしいですよ。あと、はづにゃんて……」

一通りの説明を終えると鳴海は申し訳なさそうに杏は見た目より大して悪びれることのない言葉を言った。

「んで、どうして鎖なんかで繋いでるの？ あんたもしかしてそういう趣味の人？」

「あんたと一緒にするな。どういうわけか知らないですけど俺の祖母さんでも切ることが出来なかった代物らしくってそれで俺が何とかすることになったんです」

「で、結局未だに切ることが出来ない」と

「はい」

「役立たず」

「……」

その一言に苛立ちを感じたが、 magari なりにも間違いはないの
で返す言葉もなかった。代わりに「宗助さんは役立たずなんかじゃ
ありません!」と、葉月の怒気を孕んだ声がリビングに響いた。

「宗助さんは役立たずなんかじゃありません。宗助さんはこんな幽
霊の葉月にも優しくしてくれますし、いつも不安でいっぱいになり
そうな葉月を慰めてくれます! だから宗助さんは役立たずなんか
じゃありません。それを何も知らないあなたが勝手なこと言わない
で下さい!」

正直驚いた。葉月がこんな風に怒るなんて想像も出来なかったか
らだ。言葉もないとはこのことだ。言うだけ言ってひつくひつくと
嗚咽を漏らす葉月。そんな彼女の剣幕に圧された杏は「ごめん、は
づにゃんがそんな風に思うってことは宗助は役立たずじゃないね」
と、微笑みながら呟いた。

「よし、決めた。あたしははづにゃんが無事に成仏出来るよう協力
させてもらうよ」

「……でも、今日初めてあったのにそれに葉月は幽霊ですし」

「そんなの関係ないね。確かにあたしははづにゃんとは初めて会っ
たし、人間と幽霊っていう存在そのものが違う。でもさ、あたしが
なんとかしてあげたいって思ったからなんとかしたいって思ったん
だよ。それにこない子放っておけないしね。鳴海もそうでしょ」
「ええ、もちろん私も杏ちゃんと同じ気持ちです。だから何も気に
しないでいいんですよ」

「杏さん、鳴海さん……」

二人の言葉にまたぼろぼろと泣き始めてしまった。それを宗助は
やれやれといった顔で見ていた。

傍から見ると仲の良い姉妹にも見える。人間的に性格は破綻して
いるが、こういうところが杏さんらしいと宗助は思っていた。

「それじゃあ、新しいオカルト研究会のメンバー誕生を祝おうじゃ
ないか」

「はい、よろしく願いしますね葉月ちゃん」

「は、はい！ 葉月頑張らせていただきます！」

こうしてオカ研の新メンバーが誕生してしまった。ただこの二人の騒動に葉月を交えることを宗助は少し喜んでいた。案外、こういうのも悪くはないのかもしれない、と。

「……で、本音は？」

「鎖を無事に解いたらそのお礼にはづにゃんとキャツキャウフフさせてもらうんだ！」

「やっぱり重症だ！」

シーン4 幼女もとい妖狐の襲来

シーン4 幼女もとい妖狐の襲来

「あーはっはっはっはっは！！ 長門宗助、ついに見つけたぞ。お主の力、今日こそは我が物にしてくれるわ！！」

そんなどこかの悪役にも似たセリフを聞いたのは大学を出てしばらく歩いたところだった。

目の前には年齢にすると多分十二歳ぐらいだろうか、ただ多分なんて言い方をしたのは目の前の幼女には猫耳ならぬ狐耳と普通の人間にはついていない尻尾が生えていた。それと裾の短いミニ浴衣。まだ春先だというのに寒くないのだろうかと心配になる。

宗助はとりあえず、相手にするのも面倒だと感じ、その悪役気取りの横を通り過ぎようとしたのだが、目にも止まらぬ速さで回り込んでくると「ちょ、ちょっと待って！ 話、話だけでも聞いていこうよ！！ ね？ ね？」なんて今時流行らないナンパのような呼び止めを仕掛けてきた。

「……」

謎の幼女の呼び止めには答えず何も見なかったことにして足を進めることにする。

「ちょっと待つのじゃ！ 人が呼んでおるのに無視するとはどういう了見じゃ！」

こちらが相手の言い分を聞かずに家路に向けて足を進めていると、幼女は私は怒っていますよ！ という感情を込めて叫びだした。けれどもそんなことは宗助には関係ない。しかしその勢いもどこへやら、次第に怒りの感情はしばみ終いには「……ほんの少しだけいいのじゃ……じゃから頼む……」と言われてしまいやれやれと首を振るとその足を止めた。

正直、こういった類のモノを相手にするとろくな目に遭わないことを宗助はそう短くない人生の中で十二分に味わっている。故に我関せずのスタンスを貫きたかったのだが、どうにもこういった運命にあるらしい。

仕方ないと思いながら素性の知れない奴の話を聞くことにした。

仕方ないと思ったのはなにも興味があつたわけじゃない。涙目で引きとめられたらそれはなんか悪いことをした感があつたからだという理由からだ。

足を止めたのを確認すると少女はぱあつと花が咲いたような笑顔を浮かべた後、自分の表情に気づいたのか、げふん、げふんと咳払いをして元の調子を取り戻した。

「で、お前は一体何がしたいんだ？」

「よくぞ聞いてくれた長門宗助。わらわの名は諏訪環^{すわたまき}。偉大なる妖狐にして古くからこの土地を守っている土地神であるぞ！」

踏ん反り返って宣言する環とやら土地神に「あつそ」とだけ言い残して去ろうとするが、「うわあくん！ もうちょっとだけ、もうちょっとだけでいいから〜！ わらわの話を聞いてくれ〜！！」と、泣きつかれてしまったので、もう少しだけこの茶番に付き合うことにした。

「で、その偉大なる妖狐にして土地神の環様は俺になんのようだ？」

「うむ、お主、中々にして存外な力をその身に宿しているようじゃな？」

「……………」

「答えぬということは肯定——と、とって良さそうじゃな」

語らずとも宗助のこの力がこの世ならざる者たちにとって、喉から手が出るほど欲しい力だというのは理解している。そのせいで幼い頃から色々な目にも遭って来た。だからこそ、馴れてはいるが改めて言われるとやはり辛い。

「お主のその力「断る」……………まだ言い終わっていないんじゃないが………」

「全部聞かなくてもお前らのような奴らが何を言いたいかなんてわかる。ようは俺のこの力が欲しいんだろ？欲しいならくれてやる。俺だってこんな力、持ちたくて持っているわけじゃないんだ。だがな、生憎とくれてやりたくても譲り渡すことが出来ないんだ。だから答えはノーだ」

捲くし立てるように言い放った言葉には、宗助が長年持ち続けた怒りや苦しみがない交ぜになった感情が込められていた。

普通ならばここまで言われたら諦める奴もいたが、さすがに目の前の妖狐とやらは諦めてはくれないようだった。ただし、涙目。

「……ひつく……ひつく……わらわが悪いんじゃないんだもん……お主のその力がないとわらわは……」

「おい、泣くな」

「うわぁーん！ わらわは……わらわは……」

「……」

きっとこの土地神は力を失ってその力を失ったせいで神の座を追われた。そして神の座に返り咲くために宗助の力を欲していた。理由とすればそんな所だろう。

「……なんて言うかお前も大変なんだな」

同情するなら金をくれ、なんて言葉が流行った時代もあったが、同情するなら力をくれ、とまではいかないのが現状だ。与えられるならすぐにでも譲り渡したいのだが、そんなことは出来ない。それは宗助自身の死を意味する。宗助の持っている力というのはそういったものだ。

慰めとばかりに土地神である環の頭をわしわしと撫でてやる。こういう時ばかりはこの力も無意味ではないんだなと、思うことが出来た。

しかし……、

「隙アリじゃー!!」

ボロボロと泣いていた姿から一転して環はニヤリと人に嫌悪感を与える笑みを浮かべると、その小さな体で宗助の体に飛びつこうと

した。しかし、宗助はその類まれなる力の流れを読み取り瞬時にして環から距離を空けた。

「ちい、わらわの作戦、名付けて「女の涙で男もイチコロ作戦」が効かぬとはお主、やはり只者ではないな」

「瞬時にして感情を入れ替えられるお前のほうが只者じゃねーよ！
！ せっかく同情して何とか力になってやりたいな、なんて珍しく思ったのによ」

思わずツツコンでしまった。どうにも、こういったのに出くわす
とろくな目に遭わない。それも変な方向で。

「ふん！ お主の同情なんかいらぬわ。それよりもいいのか？ そ
んな余裕ぶっておるが本当は怖くて堪らないのじゃろう？」

「はぁ？ バカか。お前みたいなのは俺がガキの頃から嫌になるほ
ど見てるんだ。いまさら怖いなんて思うかよ。ましてや、お前みた
いな幼女相手にびくびく震えるか」

「よ、幼女じゃと！ 主は言うてはならんことを言うてしもうたな
！ うむむ、ならば次なる作戦じゃ！！ 聞いて驚け、次なる作戦
は……………」

スパアーン！！

まるで小学生の言い合いのようになっていたこの状況でこの場に
そぐわない音、例えていうなればハリセンで人の頭を思いっきり叩
いたらするような音が響いた。正確にはするようないというよりはハ
リセンで叩かれた環がいた。

「いったあーいじゃないかあ！ だ、誰じゃ！！ わらわのこの高貴
なる頭脳を秘めた頭を叩く輩は！！ おかげで重要な作戦名が吹き
飛んでしまったではないかああ！！！！？」

言い終わるか終わらないかのところで環が素っ頓狂な声をあげた。
ちなみにだが、素っ頓狂な声をあげそうになったのは環だけではな
く宗助も一緒だった。

「鳴海さん！？」

「はい、こんばんわ宗助君」

なんでこんなところに鳴海がいるのだろうか？　それもハリセン片手に……。

「な、なななな、なる、なる、鳴海い！！」

環が鳴海の名前を言いたくてでもなかなか言えないような感じでわたわたしていた。それにしてもなる、なるって言っているとそのうちなるって言いそうだよなあ。と、そんなことはどうでもいい。それよりもだ。

「鳴海さん、何してるんですかこんなところで？　あと、それって確か破理扇ですよね？」

「ええ、これは杏ちゃんが護身用に持っていけということとで渡されたんです。それはそうと宗助君、うちのタマちゃんに何かされませんでしたか？」

「いえ……特には……」

鳴海さんの笑顔がこれほど怖いと思ったのは初めてだった。普段からなんとなく掴みどころのない人だとは思っていたが、今日はそれ以上によくわからない。ん？　ちょっと待て、今うちのタマちゃんって言ってなかったか？

「ちなみにですけど鳴海さん、その幼女と知り合いなんですか？」

「はい、タマちゃんはうちの神社で奉っている神様なんですよ。普段は大人しく神社の境内で遊んでいるのですが、ただ、今日はちょっと出かけてくると言ったらまま帰りが遅かったものですから、様子を見に来てみたら……やっぱりでしたか」

「やっぱり？」

「なんとなくタマちゃんの様子がおかしかったのでもしかしたらと思っただけですけど……」

申し訳なさそうに言う鳴海に対し、環のほうは鳴海に邪魔をされたのが気に入らないのか食って掛かる。

「鳴海！　なぜわらの邪魔をする！！　もう少しであの長門宗助の力が手に入ったというに。お主はその邪魔をするというのか！？」
「タマちゃん、普段から人様にご迷惑をおかけしてはいけませんっ

て言ってますでしょ？ それに、こんな夜遅くに出歩いてもし怖い人に出くわしたらどうするつもりですか？」

「何を言うか！！ わらわは土地神じゃぞ！！ そんな輩はわらわの力で——」

「タマちゃん？」

「……ごめんなさいなのじゃ」

さっきまでの勢いはどこへやら、鳴海に名前を呼ばただけであれだけ威厳たっぷりに振舞っていた環が年相応の態度を取るようになってしまった。しばらくその調子で二人が話をしているのを眺めていると、どうやら話は終わったらしくとことと歩み寄ってくる、環がバツの悪そうな顔をしながらそっぽを向いていた。

「ほら、タマちゃん。宗助君に何か言うことがあるんじゃないですか？」

「……う、うむ……長門宗助よ……此度のことはわらわが悪かった。今回はわらわの顔に免じて許せ」

「タマちゃん？」

「ひいひい！！ ご、ごめんなさいなのじゃ！！」

「はい、よく出来ました」

相変わらず環は鳴海に齒が立たない様子で不遜な態度をとっていた環を名前を呼ぶだけで改心させるというテクニクを持っていた。これは見習いたいと宗助は思った。そうすれば家に居候しているあのバカも少しはマシになると思ったからだ。

それにしても、俺の周り……こんなのばっかだな……。

「それじゃあ宗助君、本当にごめんなさい。私からも謝らせていただきます」

「いや、別に大したことじゃないんで気にしないで下さい」

「そうですか、そう言っていただけだと安心します」

鳴海は先ほどの笑っていない笑顔とは違って普段見る本当の笑顔に戻っていた。

「鳴海！ わらわはお腹が空いたのじゃ！！ 今日晩御飯はなん

じゃ？」

「今日はタマちゃんの大好きなニコニコハンバーグですよ」

「わぁーいいなのじゃ！ ニコニコハンバーグ大好きなのじゃ！ 早く帰って仕度するのじゃ」

「はいはい、わかりましたからそんなに急がないで下さい」

環は先ほどの不遜とした態度とはうって変わって、それこそ本当に見た目どおりの振る舞いをしていた。側から見るそれは、まるで母親に甘える子供のようにも見える。そんな微笑ましい光景だった。鳴海はそんな環の手を取って家路へと帰っていった。片手にもった破理扇を除けば……。

「なんか疲れたな……」

そう呟いた時だった。目の前を歩いていた環がこちらに走ってくるのが見えた。

「ん？ なんだまだ俺に用か？」

「長門宗助よこれで終わったと思うなよ！ わらわは諦めぬからな！」

そんな本当に悪役のような捨て台詞を残して環は去っていった。

「どうしましたか？」

「なんでもないのじゃ。早く帰るのじゃ」

一人残された宗助はこの時、宗助は思った。

きっと、本当にこれで終わりじゃないんだろうな……と、

シーン5 葉月とヤキトリ（前編）

シーン5 葉月とヤキトリ

キュ、キュ、キュ、規則正しくリズムを刻むように窓を拭く音が響く。毎日掃除はしているので特に磨くところもないのだが、放っておくとすぐに窓は曇ってしまう。油断は大敵だった。

しかし、自分が磨いたピカピカの窓とは対照的に葉月の心は曇っていた。

「はぁ……」

窓際に立ちながらため息を吐いてみる。どうにも最近こうやってため息をつく回数が増えた気がする。でも、ため息を吐くことなんて初めてじゃない。そんなことは彼に出会うずっと前からしていたことだ。

今までならため息を吐くことになんら疑問を感じなかったし、特別それを意識することもなかった。それが今になってため息の回数なんかを気にするようになっていた。

外から差し込む光を一身に受けながら葉月は外の風景を眺めていた。窓の外に映る風景は手を伸ばせば届く距離にあるはずなのに、いくら自分が手を伸ばしても決して届くことはなかった。そしてまた一つため息を吐いてしまう。

理由はわかってる。それは自分が外の世界への憧れを抱いてしまったからだ。

雪と二人で暮らしていた頃もわずかながら外の世界への憧れはあった。けれども、雪が自分を救うことが出来ないとわかってからはその憧れを抱くことを止めたのだった。

だが、今は雪の代わりというわけでもないが、宗助がいる。雪が

言うには宗助ならば自分を救ってくれるということだった。今はそれだけがたった一つの希望だった。

けれども、未だに自分を救うための手立ては見つかっていない。そして、その度に葉月はため息を吐いていた。もちろん、そんな姿を見せるわけにはいかない。そんな姿を見せれば自分のために頑張ってくれている宗助を悲しませることになるからだ。

わかっている……わかっているけれども、こうして窓際に立って外の風景を眺めているとついついため息が出てしまう。

ふと、足元のほうでチャリ、という無機質な音が鳴った。自分の足についている足枷の鎖が触れた音だった。

この鎖と足枷のせいで葉月はずっとこの屋敷に留まっていた。いつもこれを見るたびに自分はここから抜け出せないのだと改めて感じさせられる。

籠の鳥。そんな言葉が脳裏をよぎったが言い得て的確な表現だと思う。自分で自分のことを囚われていると思うようになってしまっ
ては既に末期なのだろう。

「はぁ……」

もうこれで何回目になるかわからないため息を吐いたところでこれ以上考えるのを止めた。

窓際から離れようとしたとき、棧のところにあるものがあることに気づいた。

「……これは」

葉月はそれをそっと抱えると一目散に自分の部屋へと駆け込んだ。

葉月の様子がおかしい。妙によそよそしいというかそわそわとして落ち着かない。こちらが何か言っても「え？ あ……はい……そうですね」と心非ずな返事しか返ってこない。様子がおかしい（主に頭の中身）のなんていつものことだが、今の葉月はそうではない

何かがおかしかった。

「どうした？ さっきから落ち着かない様子だけど何かあったのか？」

「えう！？ な、なんでもないのですよ！」

そうは言うが視線は泳ぎっぱなし、挙動は不振、声も動揺しているのが明らかだった。

晩御飯を終えると葉月は食器の片付けもそのままにさっさと自分の部屋へと戻って行った。いつもなら食器の片づけをしてから自分の部屋に行くなりリビングでくつろぐなりするのだが、どうにも様子がおかしい。

「……なんか変だなあいつ」

そんな葉月の様子がおかしいと感じたのは一昨日ぐらいからだろうか。別に葉月が何をしていようとまったく関係のない話なのだが何を企んでいるかは知っておく必要がある。もし、それがろくでもないことならば有無を言わず阻止しなければならないからだ。

そそくさと二階に上がってしまった葉月は放っておくことにして、一人で広いリビングに残りテレビを見ることにした。いつもならば宗助がリビングでくつろいでいると、葉月がやってきて二人でのんびりとテレビでも見ているのが定番なのだが、その葉月は部屋に籠ったまま一向に出てくる気配はなかった。

広いリビングにテレビから漏れ出る笑い声だけが木霊する。テレビに映っているバラエティ番組の中で芸人がコントをやっていて、それを見ている観客がゲラゲラと笑っていた声だった。観客は楽しそうにコントを見ていたがとても宗助にはそれが面白いとは感じなかった。

どことなくうら寂しい気分になる。二人で住むにしても大きいと感じるこの家は一人になると途端静かなものだ。

そういえばこの番組は葉月がとても好きだったはずだ。毎週、有無を言わず付き合わされているため宗助も欠かさず見ている。なのに、それさえも見ずに部屋へと戻るということはそれ以上に大事

な何かがあるのだろう。

「……何を考えているんだ俺は」

気がつけば葉月のことばかり考えていた。そのせいかテレビの内容も大して頭の中に入ってこない。真面目に見る類のものではないから気にする必要もないのだが。

そんなことを馬鹿馬鹿しく思っているとテレビの中で「どうかしてるぜ！」と言って笑いを取っている芸人が映っていた。なんていうタイミングだろう……思わずチャンネルを変えてしまった。変えた先では恋愛ドラマが丁度いい場面で主人公であろう俳優とそのヒロインであろう女優の二人がキスシーンの真っ最中だった。

「……どうかしてるぜ」

事実どうかしているのだろう。思わず口を吐いて出た芸人のセリフに少しばかりの嫌悪感を抱く。きつと彼が悪いわけではないのだが、彼を見るたびにわずかながらの苛立ちを感じてしまう気がしてならない。

その後もだらだらとテレビを見ているわけでもなくただ点けているだけといった感じでリビングに残ってみたが、その日は最後まで葉月が顔を出すことはなかった。

まるで葉月が構ってくれなくて拗ねている子供みたいだった。

「寝るか……」

ポツリと呟き、宗助はテレビの電源を落とすと静かな自分の部屋へと戻っていった。

それから二日。相変わらず葉月はよそよそしいままだった。

「宗助さん。お茶碗は置いておいてください。あとで葉月が片付けておきますから」

「ん、ああ……」

そのわずかな一言を言い残すいつものように自分の部屋へと戻

っていった。

「……はあ……駄目だな」

なんだかイライラする。葉月が自分に隠し事をしているような気がしてならない。走り去っていく葉月を目で追いながらそんなことを思う。出来るだけ平静を努めようと努力してみるがこれが宗助の限界だった。

頭ではわかっている。誰にだって隠し事の一つや二つあることを。もちろん、葉月だって例外ではないだろう。でも、それを無理に掘り起こせば面倒なことになる事だってわかっている。わかっているが、どうにも納得いかない。

悶々とした気持ちを抱えていると知らない間に葉月の部屋の前に来ていた。どうやら頭で考えるよりも体のほうが正直だったようだ。「……っていくらなんでもこれはどうかと思うな」

部屋のドアに耳を当てようとしたところで思いとどまる。いくらなんでもそれはやってはいけないことだと思ったからだ。

首を振りわずかに芽生えた背徳感を必死に振り払う。後ろ髪引かれる思いでその場を後にしようとする、部屋の中から葉月の声が聞こえた。

「……ヤキトリどうして食べてくれないですか？」

焼き鳥？ 今日の晩御飯に焼き鳥なんてあったらどうか？ いや、今日は葉月の作ったカレー（本人いわく自信作）だったはずだ。焼き鳥はおろか鳥料理さえも出てはいない。

「……………」

考えること一分。宗助はある種の覚悟を決めた。

「そうだ……これはあれだ。葉月がまたよからぬ事を企んでいないかどうか確かめる為だ。なんにも気にすることはない。起こってかじや遅いんだ。だからこれはそれを未然に防ぐための行動だ。何も気にする必要はない」

自分に言い訳するように言いながらそっと葉月の部屋のドアを開ける。理性よりも興味や好奇心が上回ったようだ。昔話に出てくる

登場人物もこうやって開けてはいけない何かを開けてしまっていたのだろうきつと。

葉月の部屋は鍵がかかっておらずすんなりと開いた。前に葉月が言っていた。「宗助さんがいつでも襲いに来られるように葉月の部屋は常にフルオープンですからね！」その時は「んなわけあるか！」なんて言っていたが、まさかこんな形でそれが実現しようとは……少なくとも襲いに来たわけではないことだけは伝えておこう。あしからず。

どうやら葉月は部屋の真ん中に置いてあるテーブルに向かって何か言っていたようだ。今もしきりに「ヤキトリ……ヤキトリ……」とうわ言のように呟いている。

そっと後ろから覗き込んでみる。テーブルの上には一つの鳥かご、その中には……、

「……小鳥？」

「そ、宗助さん!？」

ようやく宗助の存在に気づいたようで葉月は驚いていた。「ど、どどどうしてここに!？」なんて見つかるはずないだろうと安心しきっていた犯人が自分を追いかけていた刑事に見つかったような顔をしてあわあわしていた。「……いや……最近お前の様子がなんだか変だったから……ちょっと気になってさ……」

少しばかりバツの悪そうな顔を浮かべながら答える。「あう……ご心配をおかけしてごめんなさいなのです。最近、ヤキトリの元気がなかったので心配で……」

「ヤキトリ? ……食うのかそれ」

「食べ物ではないのですよ! 鬼ですかあなたは!」

「……お前が言ったんだろうが」
必死に宗助から小鳥を守るようにして鳥かごを抱く。どうやらいつも通りの葉月のようだ。内心、誰かいるのだろうか? なんて思っていたからそれが人ではなくて小鳥だったから安心したとはさすがに言わない。

「でも何で小鳥なんか飼ってるんだ？」

「……この間お掃除をしていたらこの子が窓のところで横たわっていたのです。まだ息はしていたので急いで助けなきゃと思ってずっと部屋の中で飼っていました。でも……でも……宗助さん！」

「ちょ、おま！」

急に葉月に抱きつかれたので思わずうろたえてしまった。葉月はそれを気にすることもなく宗助の胸のわんわんと泣いていた。まいったな……身動きがとれない宗助は葉月が落ち着くまでこうしてやろうと思った。

「で、お前がそのヤキトリだったか、そいつが元気になるまで面倒をみてやろうとそういうことか？」

「……はい……ぐす……なのです」

葉月はまだ鼻をすすっていたがようやく落ち着いた様子でこれまでにあったことを聞くことが出来た。葉月の話によるとこうだ。葉月が家を掃除していたら窓のところに小鳥がいてそれを助けた。最初のうちは自分を警戒してエサをなかなか食べてくれなかったが、次第に懐くようになって自分の手からあげてもエサを食べてくれるようになったり、指の上に乗ったりして遊んでいたらしい。しかし、ここ数日ほどその小鳥は元気がなくてそれで葉月は心配で上の空だったということだった。

確かに籠の中にいるヤキトリは元気がない。弱っているとかそういった類のことではなさそうだが、小鳥はその場からじっとしたまま動こうとはしなかった。

「……何かわかりますでしょうか？」

心配そうに宗助の顔を見つめてくる葉月。

「……俺は獣医じゃないからなどうしてこの小鳥が弱っているかなんてわからない。祖母さんなら霊だけじゃなくて動物達の声も聞けたから、こいつらが何を思っているとか手に取るようにわかっていたらいいがな」

「じゃあ宗助さんも？」

「生憎だが、俺にはそこまでの力はない。せいぜい断片的に彼らの意識を読みとることが出来るぐらいだ」

そう言いながらさっきからこの小鳥の意識を汲み取ろうとしていた。この小鳥が宗助に何か伝えようとしているのはわかるのだが、それがはつきりとしたイメージとなつて湧き上がつてこない。

「……ふう。……駄目だ。何もわからない」

「……ヤキトリ……一体どうしたのですか？ 葉月のことを嫌になつてしまったのですか？」

ヤキトリが葉月の言葉を理解しているのかはわからないがその言葉に返答するように小さく「チィ……」と鳴いた。

「とにかくしばらく様子を見てみよう。その内俺にも何かわかるかもしれない」

そう言つてやることでどうにか葉月も納得してくれたみたいだった。それでもまだ心配そうな顔をしていたが「大丈夫だ」の一言で少しは元気になつてくれたらしい。

それからは宗助も交えてヤキトリの世話をすることになった。最初のころは宗助もヤキトリもとまどつたりしていたが次第にお互いに心を通わせることが出来ていた。しかし、ヤキトリが宗助に伝えようとしていることは未だにわかつていない。

「……どうでしょうか宗助さん？」

「……もう少しで何かわかりそうなんだがまだ駄目みたいだ」

「……そうですか。宗助さんお疲れでしょうコーヒーをご用意いたしましたからゆっくりなさってくださいです」

そう言うのとそととコーヒーを置いた。こちらがじつとその顔を見ていると「そんなに見つめられたら困っちゃいますです……」なんて言われた。口ではそんなことを言っているがその顔は落胆の色を隠しきれていなかった。

と、

「やつほー！ はづにゃん、宗助えー、杏さんの登場だよ。さっきそこの屋台で焼き鳥買ってきたから一緒に食べよう」

まさにタイミングが悪いとはこのことだろうか。焼き鳥を片手に訪ねてきた杏に葉月は、

「杏さんのバカァ!!」

そう叫ぶとヤキトリの入った鳥かごを持って自分の部屋に籠ってしまった。

意気揚々とやってきた杏は宗助に向き直ると引きつった笑みで「……ねえ宗助……これが涙？ 泣いてるのはあたし？」なんて呟き、宗助は「……奇跡ってのは起こしてこそ奇跡っていうんだな」とため息を吐いていた。

シーン5 葉月とヤキトリ（後編）

「ああ、なるほどね。それはバカって言われるわ」

それから約十分、ようやく葉月から受けた心のダメージも回復した杏は自分が持ってきた焼き鳥（全て砂肝だった）を片手に葉月の現状を聞いていた。

「葉月も事情が事情だったからあんなこと言ったんでしょけど、俺からも謝ります。すいませんでした」

深々と謝罪する宗助に杏は「ちょ、あんたが謝らなくてもいいって！ あたし別に気にしてないしバカって言われ慣れてるから！」と言った。杏の心遣いはいがたいものの、バカって言われ慣れているのはどうかと思う。

「んで、結局わからずじまいと？」

「……なんとなくですけどヤキトリが何かを俺に伝えようとしてるのはわかるんです。でも、それがはっきりしなくて……」

葉月だけではなく、宗助までも落胆していた。

「んー……ん？ ああ、なるほどねえ。そういうことか」

杏はしばし考え込んだあと何かに思い当たったようで焼き鳥をくわえながら缶ビールの蓋を開けた。杏に付き合えと言われたがさすがにこんな状況で酒なんて飲む気にはなれなかった。あとスカート穿いてるのに胡坐をかくのはやめてほしい。目のやり場に困るからだ。

宗助の心情を知ってか知らずか、視線を外したことを不審に思っていた杏はようやくそれに気づいたようにでんまりと笑みを浮かべると、

「どったの宗助？ ああそっか。あたしがスカート穿いてるのに胡坐なんてかいてるから目のやり場に困ってるってわけか。宗助のエッチ」

なんて抜かしてきやがったのでコンマ2秒の速度で杏の眼前に串

を突き立ててやる。

「あー、俺、耳の聞こえが悪いんでよく聞こえなかったんですけど今何か言いましたか？」睨みを利かせながらとぼけてみる。

「ごごごめんなさい！ 少しでも調子に乗りました！ だからそんな必殺仕置き人みたいな持ち方で串を持たないでえ！」杏が必死の形相で謝ってきたのでとりあえず許してやる。指に挟んでいた二本の串をテーブルに落とすと「はあはあ……死ぬかと思った……つか、目がマジだった……」これに懲りたら余計なことは謹んでもらいたいものだ。

「それで何かわかったんですか？」

杏は「まあね」と言うのと開けたばかりの缶ビールを一気に飲み干した。「いやあ、ビールが美味しい！ この焼き鳥も美味いしまさに人生を満喫してるって気分だねえ」そしてすぐさま二本目に突入。

「さーて、串がいっぱいあるから刺し放題だな」

「すいませんすいません！ もうふざけないから許して！」

「……ったく、人が真面目に話してるのに。で、話を戻しますけど、杏さんは何がわかったんですか？」

宗助が真面目なトーンで言うのと杏もそれを理解したらしく、酔っ払いの顔からめったに見せない真面目な顔になった。

「これはふざけて言っているわけじゃないんだけど、あんたさあ、はづにゃんのこと好き？」

「な、何言ってるんですか急に！ バカかあんたは！」

突然、話を逸らし始めたことに思わず怒鳴り返してしまう。無意識に串に手が伸びたが寸前で「真面目な話！ 真面目な話だから！ いったん落ち着こう！ ね？ ね？」と杏に止められた。よっぽどさっきの出来事がトラウマになったらしい。

「ごほん。これは茶化して言うわけじゃないんだけど、あんたがあの子のことをどう思っているかであたしはこの先を言おうかどうか決めようと思う。実際、これからあんたがどうしたらいいかどうなのも思いついた。ただね、これをあんたに話すべきかどうかはちよい

と迷いどころって感じだからどう思ってるか聞いただけ」

「……どういう事ですか？」

「なーに、そもそも難しく考えることじゃないんだよこれは。単に、野生動物と愛玩動物は違う生き物だってこと」

そこまで言って最後の一本をくわえる。さすがにそこまで言われたら宗助にもようやく杏の言いたいことがわかった。しかし、それは葉月にとってとても辛い選択になる。

「……はあ、ちっとも簡単なことじゃないな」

そう言って宗助は自分のために用意された缶ビールの蓋を開けた。

こうやって葉月の部屋の前に立ってどのくらいの時間が過ぎただろうか。コンコン、ノックをした後「……葉月聞こえてるか」短く声をかける。返ってくるのは「聞こえてなんかいないのです！ 放っておいてほしいのです！」という声だった。こうやって部屋に閉じこもっている葉月に声をかけるだけでもう何度目になるかわからない。数えるのも面倒になるくらいの回数はこうしている。杏が帰った後、ひたすら葉月を説得するためにこうしていた。

「……聞こえてなくてもいいから聞いてくれ。ヤキトリはなお前のこと嫌いで元気を失くしているんじゃない。空へ帰りたいんだ。仲間の元に行きたいんだ。だから元気を失くしているんだ。それぐらいお前にだってわかるだろう？」

「そんなのわからないのです！ ヤキトリは葉月とずっと一緒にいるのです！」

「……………」

何度やっても繰り返しかえってくるのはこの言葉だった。

堂々巡りに水掛け論。例えをあげればキリがない。一向に進まぬ状況に宗助の精神は限界だった。

「いい加減にしろ！ いつまでそうやっている気だ。お前がそうや

ってヤキトリをそこに閉じ込めておくことが本当はよくないことぐらいわかってはいるはずだろう！　だったら外へ放してやれ。それがヤキトリにとっては一番幸せなことなんだ！」

「そんなことないのです！　本当に仲間がいるのならどうしてヤキトリの仲間は誰も来てくれないのですか？　どうしてヤキトリは窓のところであぐまっついていなければならなかったのですか？　宗助さんの言っていることは全部嘘なのです！　でたらめなのです！　でも葉月は違います。ヤキトリをずっと大事に守ってみせるのです。一人ぼっちになんてさせないのです。辛いときも悲しいときもずっとずっと側にいてあげるのです！　宗助さんにはわからないですよ？　一人ぼっちでいることの辛さが、誰にも気づかれないことの悲しさが、誰にも救ってもらえないことの痛みが！　わかるわけないですよ！」

それだけ言うと、その先宗助が何を言っても返事は返ってこなかった。

葉月だってわかっている。いや、わかっていた。だからこそ認めたくないのだろう。その時がすぐそこまで迫っていることを。

だからこそ言う。嘘偽りのない本心で。装飾やきれいな事なんてない言葉で。まっさらで歪なそのままの姿で。

「葉月、少しだけ昔話をしよう。聞きたくなければ耳を塞いでくれていて構わない。もし聞いていてくれるなら何も言わずに聞いてほしい」

宗助の言葉に葉月からの返事はない。

「俺も昔同じように小鳥を飼っていたことがあった。傷ついて弱っていた小鳥だった。祖母さんには助からないだろうと言われていた。当時の俺はそれを信じなかった。世話をしていればきっと助かる。ちゃんと元気になれば空を飛べる、と。世話をしていたからかどうかは知らないが、その小鳥は奇跡的に回復した。傷ついた羽もすっかり元通りになって鳥かごの中で飛び回っていた。そんな姿を見てもちろん俺は喜んだ。俺が世話をしたから元気になったんだなんて

思い上がっていたぐらいだった。でもな……」

そこでいったん区切るとドアの向こうから涙声で「……でも……それで……どうなったんですか」と聞こえてきた。

「……うん。ある時からその小鳥はじつと窓のほうを見つめたまま動こうとしなかった。俺がいくら呼びかけても、いくらエサをあげてみても俺のほうを向いてくれることはなかった。それからしばらくして学校から帰ってくるとその小鳥は既に鳥かごの中で冷たくなっていた。俺は思った。なんで死んだのだろう……って。あんなに大事に世話をしていたのに、あんなに一緒に遊んだのに、あんなに元気だったのに……どうして？　なんで？　って思ったんだ。俺がもっとしっかりしてたら……俺がちゃんと世話をしていたら死ぬことはなかったなんて考えていた。でも、祖母さんはこう言っていた。「あの小鳥はもう一度だけ空を飛びたいと願っていた。自分の寿命が長くないことを悟っていたんだ。でもね、自分がここからいなくなってしまうばお前が寂しがると思ってそれを押し留めていたんだ。その結果、自分の願いが叶わずに死んでしまうことがわかった」のにね。でも、あの小鳥は最後にこう言っていた。『それでも君と過ごしたわずかな日々は私にとって楽しいひと時だった』と伝えてくれてさ」俺は泣いた。思い切り泣いた。思えばその小鳥も今のヤキトリみたいに自由になりたかったんだ。そんな風に思ったらその小鳥との楽しかった思い出が一気に辛く悲しいものに見えたんだ。自分が世話をしていた元気になったなんてただの幻想だった。後悔したよ。もっと早くそのことに気づいていたらあの小鳥は死ななかったかもしれないなんて。あの小鳥は自由に羽ばたいてこそ生きていたことになるんだって。そう気づいたときにはもう……遅かったんだ」

これで俺の話は終わりだ。そう締めくくるように「これからどうするかはお前が決めろ」と言葉を閉じる。

誰にも話したことの無い過去。記憶の奥底に封じ込めていた未だに残っている傷跡。それらをむき出しにすることで初めて伝わると

思った。

無言の空気が続く。部屋の前でじっと葉月が決断するのを待っている。

大丈夫。葉月ならきつとわかってくれる。そう思いそれ以上声をかけることもなくただじっと立っていた。

「……宗助さん。ヤキトリは自由に羽ばたくのが一番なのではないか？」

ドアは開くことはなかったが、葉月の声がすぐ側から聞こえてきた。

「……もし、お前がそう思うならばそれが正しいことだと思うぞ」

「……………」

カチャリ、と錠の落ちる音が響く。

「……ひつく……そうしゅけしゅあん」

数時間ぶりに見た葉月の顔はそれはもうひどい有様だった。まぶたは泣き続けていたせいで真っ赤になっていて、これでもかというぐらいに膨れ上がっていた。涙と鼻水が混じりあってぐしゃぐしゃになっているし、つややかな黒髪も顔に張りついていた。声は声で涙に濡れて声にならない声をしていた。

「……ひどい顔だな」

「……ひつく……ひつく……ぐす……しろう……ひく………しゅけ……ぐす……しゅあん……ヤキロリ……おしよらに………帰し……ましゅ………」

「……そうだな。空に帰してやろう」

胸の中で葉月は泣いた。わんわんと。宗助の服が涙で濡れるのもお構い無しだ。けれども宗助はそれを黙って受け入れる。そうすることですらでも彼女の傷が癒えるならいつまでもそうしようと思った。

別れの朝。

「ヤキトリ、お別れなのですよ」

葉月はそつと窓を開くと鳥かごの中にいるヤキトリに向かって別れの言葉を述べた。ヤキトリは外と葉月の顔を交互に見比べていたが、その小さな羽根をばたばたと羽ばたかせると後ろを振り返ることもなく大空へと飛び立っていった。

「……さようならなのですヤキトリ」

見送る葉月の頬に一滴の涙が落ちる。最後まで泣かないと言っていたのに結局葉月は泣いてしまったようだ。

「これでよかったのか？」

「……これでよかったのですよ。それにヤキトリには仲間が待っているのです。葉月と一緒にいるよりは彼らと同じ空を飛んでいたほうが幸せなのです」

そう言って振り返った葉月は笑っていた。完全に傷が癒えるのはまだ先のようだが、きつとその傷もいつかはなくなるだろう。

「それに……ヤキトリを見ていて思ったこともあるのです。あの時葉月が宗助さんに言った言葉は翻って葉月自身がずっと思っていたことなのです。それを葉月はヤキトリに重ねていた。そう思ったらヤキトリを自由にしてあげるほうが本当に幸せなんだって気づいたんです」

言葉を紡ぐようにして話す葉月にこいつも籠の鳥なのだと感じていた。

しかし、そんな表情もそこまで。

「まあ、葉月には宗助さんというお方がいますから寂しくはないのですよ。それでは早速元氣を取り戻したことですし、久しぶりに……そおおすけさあああん！！」

「寄るな幽霊！」

いつものように脳天割りを食らわせてやることでこの話は落ち着いていた。まあ色んな意味で。

最後にヤキトリが言い残したことがある。わずかに感じたそれは

たった一言の言葉、それでもたくさんの想いが詰まった大事な言葉。
ただ一言『ありがとう』と。

シーン5 葉月とヤキトリ（後編）（後書き）

予想以上に長くなってしまったので二つに分割しました。

ちなみにこの話を書いているときの晩御飯のおかずは焼き鳥が出ました（笑）作者のタイミングも奇跡的に最悪です。串は砂肝ではなくねぎまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465ba/>

俺と半透明な彼女の日常

2012年1月12日22時58分発行